
まだらに一步

夕方はこ

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

まだらに一步

【Nコード】

N7029C

【作者名】

夕方はこ

【あらすじ】

愛憎というまだらな人生を歩く、雫の物語。自殺した娘の火葬に、赤い服を着て現れる母親。その母親を憎み、恨み続ける雫。雫に優しくすることで、罪を償おうとする男。雫に無償の愛情を注ぐ京子。様々な愛憎の果てに、雫はまた、新たな一步を踏み出す。

1・雫と由樹

「じゃあ、離婚するの？」

煙草の火を灰皿で揉み消しながら、雫は関心のない声で言うと、ブラインダーの隙間に指を突っ込んだ。

「さあ……。した方がいいと思う？」

私は、機械的な仕草でコーヒーに角砂糖を落としながら、雫に訊いた。

雫は私の妹だ。14も歳が離れているため、こうして喫茶店のテーブルに向かい合って座っていても、とても姉妹には見えない。

いくら胸のうちを明かせる相手がいなかったらと言って、17の妹に家庭の相談をしていることに情けさを感じていが、それでも一人で塞ぎ込むよりはマシだと、私は自分に言いきかせた。

「知らない。姉さんにわからないなら、私にもわからないよ」

指をひっかけて開けたブラインダーの隙間から通りを見つめていた雫は、無関心に答えた。

予想通りの反応だ。気を落とすこともない。第一、私は初めからの確なアドバイスや、啓示的な言葉も求めて雫と会ったわけじゃない。私はただ、話したかっただけなのだ。

「そうね……。ごめんなさい」

謝って、私はコーヒーを口に運んだ。

その瞬間、雫はくいつと顔をこちらに向け、不思議そうな顔をして、大きな瞳で私を見つめた。

「どうして、謝るの？」

凜とした細い声で雫はそう訊かれ、私は理由もなくうろたえた。

「別に……。ただ何となくよ」

と、答えた私の声は、何処か言い訳がましかった。本当に、何も後ろめたいことがなくても、私はこういう反応をしてしまう。気が小さかった子供の頃の癖が、いまだ抜けていないのだ。

雫は、しばらく訝しげな顔で私を見つめていたが、私がコーヒーにむせて咳き込むと、すつ、と視線をブラインダーの隙間に移した。私は、コーヒーを飲みながら、ちらちらと視線をやって、久しぶりに会った妹を観察した。

長く伸びた茶髪の髪。二重瞼のぱちりと大きな瞳。高く、形の整った鼻と薄い唇。くつきりとした顎のラインが、仄かに色つぱい。17才、という若さを差し引いても余りあるくらい、雫は魅力的に見えた。

私にも、こんな時があつたのだろうか。私は、既に潤いを失った自分の頬に触れて、記憶を呼び起こしてみた。

私の17才。度重なる浮気の果てに、とうとう父に愛想をつかされた母が、3才になつた雫の世話を私に押し付けて、男と遊び回っていた頃。

私の、母に対する恨み妬み憎しみが募り募つて、破裂寸前だった頃だ。

その1年後に、私は母が連れ込んだ男の財布を盗み、夜行バスに乗って博多を飛び出した。それっきり、母と雫とは会うことはなかった。

私は、東京に着いたその日、雨凌ぎに入った六本木のバーで声を掛けてきた男の部屋に転がり込み、2年後にその男に求婚され、入籍した。

母に対する復讐の気持を込め、婚姻届けのコピーと、半裸状態で夫と抱き合っている写真を封筒に入れて送つたが、返事はなかった。思えば、子育てを放棄して男と朝まで遊び回っていた母にとって、娘の勝手な結婚や猥褻な写真など、まったく意味のないものだったのだろう。

送つたあとで、母に対して一般的な反応を期待した自分が情けなくなり、同時に自分の哀れさに泣けて、夜通し飲み続けた。

雫と再会したのは、私が家を飛び出してから11年後、今から2年前だ。

雫は、私と同じように、母が連れこんできた男から財布を奪い、逃げてきた。

私の住所は、私が母に送ったあの封筒でわかったのだと、雫は言った。驚くべきことに、母はあの封筒を、さも大切そうに、通帳や印鑑と一緒に保管していたのだという。

雫は最初、通帳とカードを盗んで逃げようとしたが、二桁の残高を見て諦めざるおえなかった。

そのとき、私の封筒を見つけたのだ。

私はそのことを聞いてハツとなったが、雫は私が尋ねる前に、“中身はみてないから”と言い、頬を紅くした。

妹の純粹さに、私の方が赤くなった。

雫はそれから3日だけ居座って、4日目の昼には、住み込みの仕事を見つけたからと言って出ていった。

まっとうな仕事ではないかと、すぐにピンときたが、私に雫を止める理由も、権利もなかった。

雫が私に甘える気でいたなら、無理にでも夫に頼んで、いくらでも甘えさせる気でいたが、雫はちゃんと自立していて、いかがわしくても、自分で仕事を見つけてきた。どんな仕事であっても、自立して生きていけるのなら、素晴らしいことだ。体裁ばかり気にして、食いつばぐれる人もいる世の中なのだから、多少道を外れたところで、誰に咎める権利があるのか。

綺麗ごとを口にする人間は、綺麗ごとに縛られる。人間、生きていられれば、それだけでOKなのだ。

「いまは、どうしてるの？まだ、あのお店で働いてるの？」

私は、カップをテーブルに戻し、雫に訊いた。雫は、ブラインダーの隙間から通りを見つめるのを止め、私を見ると、少し躊躇ってから口を開いた。

「お店は、もう辞めた」

「へえ、何かあてでも出来たの？」

雫は、小さく首を振った。はらりはらりと、長い髪が揺れる。

「じゃあ、いまはどうしてるの？」

訊きながら、私はカップに手を伸ばした。気まずい感じはしたが、嫌な予感はしなかった。

雫は、少しうつ向き加減で、答えた。

「貯金潰してる。無くなったら、また働くけど、もうお店には戻らない」

「そう…」

とだけ私は言って、カップに口をつけた。甘えたいなら、甘えてもいいのよ、と言ってあげたかったが、夫と別居中の私では雫も心細いだろうし、何より私自身が不安定で、沈没寸前だった。

こんな時に、帰る家もなく頼る親もないというのは、17の雫にとっても私にとっても、辛く寂しいことだが、それを嘆いても誰も助けてはくれない。

行き先の知れないバスに乗れない人間は、人生のすべてに乗り遅れる。行き先がわかってるバスに乗れなくても、人生がどうにかなるにも関わらず。

私と雫は、乗らなければ居場所を得られないとわかっている分、迷うことはない。

でも、だからと言って不安がないということにはならない。本当は迷って立ち止まりたいのだ。

その場所が与えられれば、私も雫もきつとそうする。迷うこと立ち止まれるということは、本当は幸せなのだ。

「本当はね、待ってるんだよ」

ぼつりと寂しげに、雫は声をこぼした。

「一緒に暮らそうって言うってくれたから…」

雫は、自らが口にした儂い望みに耐えられなくなって、泣き出した。

ひつく、ひつくと肩を震わせて涙を流し、嗚咽する雫を置いて、私はテーブルを立った。

2・腑におちないこと

キョロ目と蛇口を捻って、汚れた洗面台を洗い流し、顔をあげて鏡を見る。

不健康に色白の肌が、蛍光灯に照らされてさらに白くなっている。姉さんが羨ましがった大きな瞳の下には、色濃い隈が浮かんでいる。渦を巻いて流れ落ちる水の音が、半開きの窓から響く雨の音と重なる。蛇口を捻って水を止め、もう一度鏡に目をむけると薄い唇が紫に変色していた。死体みたい、と心で呟いて洗面所をあとにする。

大きな瞳はいくら人に羨ましがられても、わたしにとってはずっとコンプレックスだった。

ギョロ目、ギョロ目とからかわれた小学生時代からそれは続き、決定的だったのは、中学に入ってはじめて好きになつた男子に、“おまえのでっかい目玉、俺好かん。いつつも睨まれてるみたいで、気分わるか”と、吐き捨てられたことだった。

以来、まっすぐ人の眼を見て話すことが出来ず、東京に来て働き出すまでその癖はなおらなかった。

戻ると、姉さんの夫が心配そうにわたしを見つめてきたので、大丈夫です、と弱々しく微笑んで、座布団に正座した。

瞳を閉じると、焼香の匂いがぐんと濃度を増す。告別式だということに、すすり泣きひとつ聞こえてこない。静寂が悲しみを麻痺させているのか、悲しみが静寂を呼んでいるのか。それとも、この場にいるすべての人間が、悲しみなど感じていないのか。

まるで姉さんの人生を映しているかのようだった。姉さんは、人生に絶望することはあっても、悲しみを覚えることはなかっただろうから。

焼香の匂いに酔って、わたしは再びよろよろと席をたつた。

3日前、病院の廊下で見かけた男性が、姉さんの別居中の夫だった。

通夜中、わたしは3回も吐き、その度に姉さんの夫は、休んでもいいよ、と気遣ってくれたが、わたしは気丈に断り続けた。あの女が現れたら、即座に追いつもりだったから。

通夜は、姉さんの夫の身内と、姉さんと親しかった友人数人だけを呼び、営まれた。わたしが何もしていない以上、あの女が来る可能性はなかった。それでも、通夜中ずっと、わたしは落ち着かなかった。

姉さんの友人は、どういうわけか水商売関係の女性ばかりで、そのうちの1人は、わたしがこの間まで働いていたお店の先輩だった。わたしは少し怪訝に思い、通夜ぶるまいの最中にその先輩の肩を叩いた。

「あら、栗ちゃん……」

振り返った先輩は、きまり悪そうにわたしから視線を外した。

「奇遇ですね。姉さんのこと、知ってたんですか？」

「ええ、まあ……でも、あなたのお姉さんとは、知らなかった。本当よ」

そう言っただけ先輩はぎこちなく微笑んだが、わたしは、しらっ、と無表情を返した。

「姉さんとは、いつから？」

「2年ぐらい前かしら……。知り合いの紹介で」

それだけ言うと、先輩はわざとらしく、あっ、と声をあげ、逃げるように姉さんの夫の下へ駆け寄っていった。

わたしが東京に逃げてきたのも、2年前だ。何か、腑におちない視線をあげると、姉さんの夫が礼儀正しく先輩に頭を下げていた。

「すまないね。こんなことになってしまって」

火葬場へ向かう車内で、隣に座る姉さんの夫が、不意に口を開い

た。

とうとう告別式にも、あの女は姿を見せなかった。でも、むしろの方が自然なのだから、何も感じる必要はない。

「死んだのは姉さんだから、あなたが謝らなくていいです」

わたしは、冷たく不機嫌な風を装って、言った。話をする気分ではなかったから。

「冷静だね。具合は大丈夫なのかい？」

「平気です」

「帰ったら、少し話せるかな？由樹のことです…」

「いま話してください」

わたしは無言を言わせなかった。この人にとって重要だからと言って、わたしにとって重要だとは限らない。仮に重要だとしても、いつでも話そうが、その事実は変わらないから待つだけ時間の無駄だ。太股のうえで抱いた遺影を抱きなおして、わたしは話を待った。

姉さんの夫は、少し躊躇う様子をみせ、前にいる運転手に視線を投げてから、ひとつ深呼吸をして喋りはじめた。

「妊娠してたらしいんだ。4ヶ月だから、心あたりはある。おそらく、僕の子だ」

びくり、と反射的にわたしは肩を揺らした。鼓動が高なり、頬が熱る。

「姉さんは、気づいてたの？」

「検査薬が捨ててあったから、おそらく」

神妙な口調で、姉さんの夫は言うつと、それっきり沈黙した。言葉を失ったわたしも沈黙して、しばらくの間、車内は重い静寂に支配された。

静寂を破ったのは、運転手だった。

「あの、御主人さん？」

バックミラーにちらちら視線をやりながら、おずおずと運転手は言った。

「なんですか？」

「後ろのタクシー、ずっとついてきますね。誰か御遺族の方、遅れてきたんでしょうかね」

全身に悪寒を感じ、わたしは肩越しに振り返った。1台の白いタクシーが、さほど距離を置かずに、ついてきている。

「そんなはずは……」

呟きながら、姉さんの夫も振り返った。

「誰なんだ？」

と眉を寄せる姉さんの夫の傍らで、わたしはあの女だと確信していた。

3・雨と憎しみと

ワイパーが力強く唸りをあげ、雨水を弾く。

火葬場に近づくにつれ、弱まっていた雨足が再び強くなり、ボツボツとフロントガラスを叩きはじめた。

追走してくる白いタクシーは、ガラスを流れる雨水の向こうに霞みながらも、しっかりと同じ距離を保ち続けている。

わたしは、時々肩越しに振り返って様子を伺ったが、タクシーが離れる気配はなかった。無意識に、遺影を抱く腕に力が入った。

「心配かい？」

姉さんの夫が顔だけわたしに向けて、訊いてきた。

「いいえ。誰がタクシーに乗ってるか、わかりますか？」

「さあ……うちの親戚は全員集まってたから、由樹の友人じゃないかな。彼女の交友関係をすべて把握してるわけじゃないしね」

「浮気相手かも」

悪戯に、わたしは言った。もしそうなら、かなり面白いことになりそうだけど、乗っているのは九十八九、あの女だろう。

「まさか」

冗談を受け流すように、姉さんの夫は笑った。

降る雨のむこうに、電柱に立掛けられた『斎場』という看板が見えたのは、その時だった。

カチカチカチと、ウィンカーの規則的なリズムが響いたのと同時に、車は左折した。背後のタクシーも、続いてくる。

「止まったら、先に行ってくれませんか？僕は、後ろの人が誰か確認してから行くから」

姉さんの夫はそう言って、手に持っていた位牌をわたしに差し出した。

わたしは頷き、左腕だけで遺影を抱いて、右手で位牌を受け取った。

「でも…」

タクシーに乗っているのがあの女なら、わたし自身の手で追い返したかった。

「なんだい？」

姉さんの夫が聞き返した瞬間、車が停車した。

「ちよつと待つてて下さい。後ろから、傘出しますから」

運転手の声にわたしは答えるタイミングを逸して、口を閉ざした。姉さんの夫は別段気にする様子もなく、シートベルトを外している運転手に、すみません、と礼を言っている。

運転手が外に出ていくと、車内は静寂に満たされて、ワイパーの音だけが響いた。

背後でボタン、とトランクを開ける音。続いて、バサツと傘を開く音。また、ボタンと今度はトランクを閉める音。

振り返ると透明のビニール傘をさした運転手が、2本の傘を空いた手に持って、姉さんの夫側のドアへと移動していた。

白のタクシーは、少し距離をおいた位置に停車している。料金を払っているのか、あの女はまだ降りてこない。

威嚇するように目を細めてタクシーを見つめていると、ひやりと首筋が冷えた。

振り向くと、姉さんの夫がドアを開け、運転手から傘を受け取っていた。

雨を孕んだ午後の秋風は冷たく、肌寒さを感じさせる。姉さんの夫は、車から降りながら傘をさすとそのままタクシーの方へと歩いていった。

わたしはすぐに後を追おうとしたが、両手は塞がっていた。

「すみません、これ持つて下さい」

言うより早くわたしは位牌と遺影を運転手に押しつけ、傘もささず走りだした。

強風が吹き、雨が横殴りに変わった。雨が睫毛を濡らし、視界がにじむ。その視界の奥で、タクシーのドアが開く。姉さんの夫の足

が止まり、タクシーから1人の女が出てきた。

赤い傘、赤い上着、赤いスカート。間違いなく、あの女だった。

濡れた髪が頬に張りつくのもかまわずわたしは走り、姉さんの夫の脇をすり抜けた次の瞬間、わたしはあの女に飛びついていてた。

わたしの体当たりをくらってバランスを崩した女は、背中をタクシーのドアに打ちつけて地面にしゃがみ込み、わたしもぶつかつた衝撃でふっとんで、びしゃんっ、と激しい音をたてて水たまりに倒れ込んだ。

うつろ、とうめきながら体を起こすと、タクシーのドアにもたれながら立ち上がるうとしていた女と目が合った。

その瞬間、わたしはまた女に飛びかかった。こんどは女も抵抗して、両腕を使ってわたしの体を払いのけた。わたしは再び、水たまりに体を投げ出した。全身がびしょびしょになり、雨水を含んだ喪服がずしりと重くなる。それでも、わたしはすぐに立ち上がり、息を切らして呆然としている女の左頬を力一杯叩いた。

バチンと水を含んだ鈍い音。女が叩かれた左頬に左手を添えた瞬間に、右頬を叩く。その衝撃でバランスを崩した女の濡れた頭を、叩いて叩いて叩いて叩いて、叩きまくる。女はしゃがみ込み、両手をかざして頭を隠そうとするが、そのうえから、容赦なく叩きまくる。ガツン、と鈍い感触。同時に頭を抑えて、女が横向きに倒れた。動悸が激しくなり、肩が揺れる。女を見下ろしながら、地面を叩く雨の轟音の中、わたしは叫ぶ。

「あんたのせいだ！あんたみたいにならなくなかったから、姉さんは自殺したんだ！！」

叫んで、怒りをそのまま足に込め、思いっきり女の腹部に蹴りを入れた。女はうめいて、弱々しく腹部に手をあてた。びしょ濡れの顔は、苦悶に歪んでいる。

その表情に、いままでの憎しみが一気に吹き出てきた。わたしと姉さんの苦しみは、そんなものじゃない。まだ足りない。千回殴り殺したって、消えはしない。

女は濡れた地面を這って、逃げようとしている。わたしは、もう一発、腹部に蹴りを入れた。ぐしゃりと、女が崩れる。その背中を、何度も何度も靴の踵で踏みつける。女は、もう動かなかった。

「やめないか！」

姉さんの夫が、わたしを背後から羽交い締めにした。ずるずるとわたしは引きずられ、女から離される。

タクシーの運転手が女の傍らにしゃがみ込み、すぐに立ち上がって車内に戻って携帯を掛けた。

わたしから離れた姉さんの夫が女を仰向けにして、両膝の裏と首の後ろに手を回して抱き上げる。

だらんと力なく垂れる女の両手を見つめながら、わたしはその場にしゃがみ込んだ。

両手で耳を塞ぎ、雨音を遠ざける。

雨は涙を流しても、憎しみや恨みまで拭い去ってはくれない。雨がすべてを流してくれるなら、わたしは死ぬまでずっとこうしている。

憎しみは、それを抱いた瞬間から増殖だけを続け、やがて人生を支配する。憎しみは消えない。忘れることはあっても、死ぬまで心に巢食い続ける。そして、幸せを目前にしたとき、或いは再び憎しみを抱くとき、心の中で破裂してすべてを破滅へと導いていく。

憎しみを抱いた人間に寝床はなく、帰る場所すら失う。

わたしと姉さんにはもう、帰る場所も安らかに眠りにつける場所もなかった。いや、あつてはならなかった。わたしたちは、憎むべき宿命を受け入れることでしか、生きる道を与えられなかったから。

わたしたちに憎むべき宿命を与えたのは、あの女だ。姉さんは、繰り返ししたくなくただだ。憎むべき宿命の連鎖を。

4・殺す覚悟

物心ついたとき、わたしの側にいてくれたのは、いつもお婆ちゃんだった。わたしの母親代わりをすることに疲れた姉さんが出ていっても、あの女は反省することなく遊び続け、拳句に自分の母親を呼び寄せて育児を押しつけた。

協力など一切せず、男が来るからと真冬の夜中にお婆ちゃんとうたしを外へ放り出そうとしたこともある。そのときは流石にお婆ちゃんも激怒して、あの女が折れた。でも、折れたのは外へ放り出すことだけで、あの女はすっかり一晩、男と情事を楽しんでいた。

わたしに聞こえるように、お婆ちゃんにあてつけるように、わざと激しく叫び、悶えていた。

叫び声が聞こえないようにと、カサカサに乾いたお婆ちゃんの掌がわたしの耳を塞いでくれた感触と記憶は、いまだに消えてはくれない。夢に見る。

あのとき、お婆ちゃんはきつと、自分の耳を塞ぎたかった筈だ。だから夢の中でわたしは、お婆ちゃんの手をそつと外して、自分の手で耳を塞ぐ。するとお婆ちゃんは微笑んで、自分の耳を塞いでくれる。耳を塞いだ格好で2人は微笑み合う。

何も聞こえない。静寂が、わたしとお婆ちゃんが共有する幸せ。地獄を生きても、夢の中では幸せになれる。それだけが救いだつた。

「笑っちゃう。火葬場に救急車なんて」

わたしは、壁にもたれて、畳に足を投げ出して座っていた。四畳半の和室の片隅には姉さんの祭壇があり、線香の香りが仄かに匂う。祭壇の前では、姉さんの夫が両手を合わせて正座していた。

「笑いごとじゃないだろう。あの人が君の母親じゃなかったら、訴

えられてるところだ」

両手を合わせたまま姉さんの夫は言い、喋り終わるとわたしの方に体を向けて足を崩し、あぐらを掻いた。

「あんなこと、母親じゃなかったらしないよ」

感情のない声で、わたしは言った。でもわたしは、あの女を母親と想ったことはない。

「由樹が“小さい頃に死んだ”って言うてたから、そう思ってた。

君も何も言わなかったしね」

「見たでしょ？自殺した娘の火葬に、赤い服着てくるような女だよ。完全に狂ってる」

わたしは投げ出していた足を体に寄せて、膝を抱えた。

あの女の話をする、自分もまともじゃないような気がして、不安になる。どんなにわたしが増み、恨み、妬みを募らせても、あの女の血をわたしが受け継いでいることに変わりはない。わたしが持つ感情はすべて、あの女が持っていたものだ。つまり恨めば恨むほど、わたしはあの女に近づいていく。それがわかっていながら恨むことを止められないのは、恨むことでしか正気を保てないから。殺したいほど人を恨んだことがある人ならわかると思う。環境によっては、恨まない方が異常だということを。少し考えればわかることだ。正常がすべて正常なら、異常が生まれる余地はどこにもない筈なんだから。

「斎場の前で君は、あの人みたいになんたくなかったから、由樹は死んだって言ったね。どういふことなんだい？」

わたしの目を真っ直ぐ見つめて、姉さんの夫は言った。わたしは虚ろに揺れる瞳で見つめ返した。

「怖かったんだよ、きつと。でも、わからない。わたしは姉さんじゃないし」

「怖いって、何が？」

「命を生むこと。あの女の下で育ったわたしたちには、平凡な幸せを幸せと呼ぶことが怖いんだよ。わたしたちが平凡な幸せを求めた

結果、あの女と同じことを繰り返したら、苦しむのは生まれくる命でしょ？わたしも姉さんも、憎しみを覚えるぐらい、あの女と似てるから」

「でも、それなら何も自殺する必要はない」

「おろせばよかったってこと？でも、生まれてきた命を殺すなんて、あの女より最低だよ。でも、だからって生んだとしても、あの女と同じことを繰り返すかもしれない恐怖がある。姉さんは、どっちにも耐えることが出来なかった。ただ、それだけ」

「それだけ…それだけか」

姉さんの夫は、抜け殻のように繰り返し呟いた。

「あの女が母親じゃなかったら、姉さんは自殺なんか選んでなかった。だから、あの女が殺したも同然なんだよ」

曲げた膝の上に顎をのせ、わたしは目の前の空間を見つめた。

姉さんが火葬されたあと、あの女に付き添って病院にいったタクシーの運転手から連絡があった。わたしの蹴りは、あの女の肋骨を2本、へし折つたらしい。

手術の為に一晩入院するから、その間に一度会いに来てくれと、あの女はわたしに伝えるようにタクシーの運転手にことづけした。律儀な運転手はしっかりわたしに伝えてくれたけど、わたしは会いにはいかなかった。

あの女はきつと、わたしが断ち切った親子の縁の切れはしに、しがつこうとしたのだと思う。姉さんが自殺したことで、目が覚めたのだらう。

でも、許しを乞うような真似は絶対にさせたくなかった。わたしと姉さんの人生は、わたし達の体内にながれるあの女の血の犠牲になっっているのだから。許しを乞われても、例えあの女が自害したとしても、わたしの人生が変わることはない。這いつくばって惨め恥辱に生きてきた今までも、命の影さえその闇の中に溶けてしまうような樹海の中を歩き生きるしかないこれからも。あの女がわたしを産み堕としたという宿命は変わらない。

あの女がしなければならぬことは、わたしと正常な親子関係を築くことでも、罪を償うことでもない。あの女に残されている道は、自分の為にだけ生きて、他人を巻き込まず、死を待つことだけだ。存在するだけで人を苦しめる人間は、息を殺して孤独に生きることが何よりも他人の為になるんだから。

「生まれたら、死ぬまで生きるしかない。惨めでも、情けなくても、恥ずかしくても、呪っても、怨んでも。綺麗に生きて死にたいなんて贅沢な考え」

わたしは呟いて、顔を膝と胸の間に埋めた。

「自殺するぐらいなら、殺してもらえばよかったんだよ、あの女に」
「よすんだ。そんな考え方は」

虚無感を振り払うように、姉さんの夫は否定した。わたしは顔をあげて、姉さんの夫を冷ややかに見つめた。

「どうして？殺す覚悟のない人間に、命を育てる権利なんてないよ。姉さんは、そのぶんじゃ立派だね。自分でちゃんと始末したんだから」

そう吐き捨てて、視線を畳に向けた瞬間、わたしは頬を叩かれた。乾いた音が鼓膜に響いて、ヒリヒリと痛みが広がっていく。わたしは、姉さんの夫を睨んだ。

「いまみたいなことは、二度と口にしないでくれ」

姉さんの夫は、怒りに眼を見開いていた。

「姉さんを蒲つてるつもりなの？」

わたしは、凍てついた声で言い、再び足を投げ出した。そして、ごっつん、と一回、後頭部で壁を叩く。

「違う。君の為だ」

「わたしの為…」

呟いて、また後頭部を壁に打つ。

「だったら、殺して。わたしを可哀想とか病んでると思うなら…まともになつて欲しいと思うなら殺してよ!!!」

叫びが消える前に、わたしは狂ったように何度も後頭部を壁にぶ

つけた。

脳が揺れ、痛みが響き、意識が歪む。

姉さんの夫がわたしを抱きしめて、そのまま畳に押し倒した。

「離して！死なせてよ！何もわからないくせに！救う気もないくせに、優しくしないで！姉さんが死んだのに、なんでわからないのよ！！」

わたしは、喉が渴れ、耳が痛むほど叫び散らして、抑えつけようとする姉さんの夫の体を押し退け、和室から飛び出した。

髪にまとわりついた線香の匂いが、消えない。死の匂いが、わたしから離れない。

わたしは、匂いを消すために浴室に飛込み、服を着たままシャワーに打たれて、そのままその場にしゃがみ込んだ。

瞳を閉じると、タイルを弾く水しぶきの音がノイズの破片となって、鼓膜に突き刺さっていく。

わたしの意識は、眠るように心の深遠へと沈んでいき、やがてひとつの記憶を呼び起こす。

「戻ったら、一緒に暮らそう」

記憶から聞こえた遠い声は、確かに、わたしに救いと希望を与えてくれた、彼の声だった。

5・夜明けの恋

夜闇に溶けている間は、孤独が和らいだ。バス停のベンチに腰を沈めて、闇を照らしては去っていく車の流れを睨み続けるのが好きだった。

あの日。わたしは夜明けまでベンチに座り続け、世界が青白い光に包まれていくのを茫然と感じていた。

4月だというのに、最後のお客を見送った深夜3時過ぎには、夜空から粉雪が舞うほど冷え込んでいて、わたしは両手を擦り合わせながら、お店に戻ったのを覚えている。

「ご苦労さま。もう帰っていいわよ」

テーブルにキャンドルを灯し、売り上げを電卓で叩いていたママが、顔もあげずに言った。

わたしは無言でママが座るテーブルの横を通り、控室に入って着替え、バッグを取ると、その中から1枚の写真を取りだし、控室から出た。

フロアに戻ると、丁度テーブルから立ちあがったママが肩越しに振り返ったので、目が合った。

わたしは無様にママを睨み、ママは溜め息を吐いて右手で頭を掻いた。左手には、伝票や売り上げが入ったハンドバックを持っている。

「今日はなに？」

投げやりの調子でママは言って、振り向いた。わたしは、働き出したその日からほぼ毎日、様々な因縁をつけて、ママにくっついてかかっていた。それを、単純に反抗期なだけとわりきって、わたしと接してきたママも、最近は少々うんざりしているようだった。

「昨日か一昨日、この人、来ませんでしたか？」

わたしは、手に持っている写真をママの前につき出した。

ママは、写真を受けとる前にわたしの顔に視線を投げ、それからわたしの手から写真を引き抜いた。

「ああ、この人ね。来てないわよ。この人が、どうかしたの？」

写真をわたしに返ししながら、ママが訊いてきた。

「別に」

無愛想に答えて、わたしは写真を受けとり、バックにしまった。

「あまり顔を出す人じゃないわね。羽振りがいいわけでもないし。ヒモにしたいの？」

サバサバした口調でママは言い、バックからマルポ口を取り出して、1本、口にくわえた。反射的にわたしがポケットに手を突っ込むと、ママは煙草を口にくわえたまま、いいわよ、と右手をあげて自分で火をつけた。

ポケットには、ライターもマッチもなかったので、わたしは内心ほっとした。

「違います。行方不明…かもしれないから」

言葉を選び損ない、わたしは小声になった。

「何よそれ」

煙草を右手の指に挟んで、ママはクツクツと笑った。

「それで、なんであなたが探してるの？ま、それはあなたの自由だけど、失踪なんてよくあることよ。深追いはしないことね」

「そういうのじゃありません」

ぶつきらぼうに、わたしは言った。ママは白く細い煙を、天井に向けて吐いた。

「本当に、急にいなくなったから、気になってるだけです」

「そう…。でもあなた、その人のテーブルについたことないでしょ？その人、里美ばかり指名してたから、覚えてるのよ。いつ顔合わせたの？」

「話さなきゃ、いけませんか？」

わたしは口を尖らせ、不満を露にした。

「嫌ならいいわよ。べつに知りたくもないし」

素気なくママ言い、煙を吐いた。

「じゃあ何？あなたが居ないときにその人が来たら、連絡させればいいの？」

「いえ、その人には何も言わずに、わたしを呼んでください」

「怖いわね。包丁でグサツとかやめてよ。やるなら外でやってね」

「しません、そんなこと。ただ、会いたいただけなんです」

「会いたいただけね…」

ママはしたり顔で呟くと、にやりと悪戯な笑みを浮かべた。

「なんですか」

「あなたも、可愛いところあるじゃないの」

「帰ります」

ママの冷やかしを無視して、わたしはツカツカとママの脇を通り抜けた。ママは、にやにや笑いながら、わたしを目で追っていた。

「お疲れさま。また明日ね」

わたしは返事をしなかった。けれど、背中であら聞いたママの声は、今までになくどこか優しげだった。

わたしが肩越しに振り返ると、ママは微笑み、指に挟んだ煙草もそのままに、右手を振った。

ママは、エレベーターのドアが閉まるまで、わたしに手を振り続けていた。まるで上京する娘を見送りにきた母親みたいに、優しい微笑みを浮かべて。

夜明けまでベンチに座っていたせいで、わたしの体は冷えきっていた。

夜明けの街角は、夜中に降った粉雪のせいで濡れていて、吹く風は冷たかった。雨上がりの朝のような、焦げた匂いもする。

寒さに耐えられなくなったわたしは、自販機でホットの缶コーヒを3本買って、2本をジーンズのポケット左右に詰め、1本を両

手で握りしめながら、帰路を急いだ。

澄んだ空には、夜に置いていかれた月がまだ、居場所を探して浮いていた。

わたしは消えそうな月を見上げながら歩き、ふと立ち止まっては、人気がない街角に彼の姿を探した。

彼とはじめて会話したのも、こんな風に冷えた朝だった。

彼がいなくなってから、わたしはあの日の偶然がまたやってこないかと、未練たらしく女々しさ一杯にぐずぐずと、夜明けをバス停のベンチで迎えている。

もしも、彼がわたしに逢いたいと思っていれば、きっと彼も同じことをする。

何の根拠もなくそう思い込んだのは、わたしがまだ終りを認められなかつたからで、彼とわたしに特別な愛や絆があつたからじゃない。

よくある恋愛小説のような都合の良い現実を訪れるのを、淋しさのあまり幼くなってしまったわたしは、期待していた。

朝が連れてくる太陽が、置き去りの月を空から消滅させるように、誰かわたしの淋しさを消滅させてくれないだろうか。

わたしには結局、待つことしか出来ない。彼が帰ってきてくれるか、淋しさが消え去ってくれるかの、どちらかを。

マンシヨンの玄関に着いた頃には、3本の缶コーヒーはもう冷めていた。

わたしは、玄関の集合ポストの上に缶コーヒーを全部ならべてから、暗証番号を押して、扉を開けた。

必要か、必要でないか。夕方降りてくるとき、缶コーヒーがなくなっていたら、彼は帰ってきてくれる。

意味のない願かけをして、わたしはエレベーターに乗った。

6・里美と楓

夕方、玄関に行くとき缶コーヒーは、一本も残ってなかった。けれど、目覚めが悪く不機嫌なわたしにはそんなことはどうでもよく、暗くならないうちにお店に行きたくて、わたしは足早に玄関を通り過ぎた。

駅のコンビニで、ばったり里美さんと会った。22歳の里美さんは、19の時からホステスをはじめ、わたしが入ったのと同時期に、ママがよその店から引き抜いてきた。

接客以外では無口なところはわたしと似てるので、必然的にわたしと里美さんが会話をすることは少なかった。それと、里美さんが、彼のお気に入りだったということもある。

彼は里美さん以外の子とはテーブルにつこうとせず、里美さんが欠勤のときは、何もせずにそのまま帰った。

他の子とはまったく喋らず、わたしも例外ではなかった。

扱いにくいわりにはあまり羽振りのよくない彼を、ママも里美さんも良くはおもっていなかった。彼はよく指名したまま待ち惚けをくらっていた。

腕を組んでひたすら悶々と1人のホステス嬢を待ち続ける彼が純粹なのか、馬鹿なのかはわからないけど、その様は見えていてひどく滑稽だった。彼は、里美さんにとっても、他のホステスにとっても、さらに言えばお店にとっても、面白くない客だった。

「おはようございます」

ジュースやお茶のペットボトルが並ぶ冷蔵庫の前で、首筋を掻きながら佇んでいた里美さんに、わたしは挨拶した。

里美さんは、わたしの方をちらっとみてからすぐに視線を冷蔵庫に戻し、ぽつりと、おはよう、と呟いて、冷蔵庫を開けた。

「他の人にも、そうやって挨拶するの？」

ポカリのペットボトルに手を伸ばし、指先をキャップに触れたまま静止して、里美さんは言った。

「大概、します。返事してくれない人がほとんどですけど」

「以外と真面目なんだね」

里美さんは、ポカリから指先を離し、烏龍茶のペットボトルをとって冷蔵庫から離れた。

わたしは里美さんが触れていたポカリを掴んで、あとを追った。

「店の外だと、反応みるのが楽しいんです。主婦の人とか、特に」
「趣味わるい」

お弁当のコーナーの前で、里美さんは足を止めた。わたしも足を止める。

「交差点とかで、旦那と子供連れて歩いてるの見たら、声かけたくなりませんか？」

里美さんは何も答えず、唐揚げ弁当を手にとってレジに向かった。レジから、温めますか？、と愛想良い声がする。

里美さんは、無言で頷いた。

わたしは、ポカリをおにぎりの列に突っ込み、ツカツカと足音をたてて、レジの前に立つ里美さんに歩みよった。

いらっしやいませこちらへどうぞ、と隣のレジから愛想の良い声。わたしは隣のレジを睨んで、店員の笑顔を凍てつかせてから、里美さんの肩を叩いた。

肩越しに振り返った里美さんの表情は、明らかに不機嫌だった。

「彼のこと、何か知りませんか？」

「彼って誰？」

「竜一です。神山、竜一」

「知らない、そんな人」

「いつも里美さんばかり指名してた人です。最近、来なくなりました」
「ああ、あの人。カミヤマっていうんだ。私、あの人には名刺渡し
てないから」

素気なく里美さんは言い、店員からお弁当と烏龍茶の入った袋を

受け取って、足早に外に出た。

わたしは里美さんの横に並んで、夕闇に移りゆく街を歩いた。
「なんで急に怒ったんですか？」

里美さんの歩幅に合わせて、少し足早になりながら、わたしは訊いた。

「別に、怒ってないよ」

そう答えた里美さんの横顔からはもう、さっきの不機嫌な表情は消えていた。

「嘘、怒ってた。里美さんが感情剥き出しにすることなんて、滅多にないから、すぐわかりますよ」

「怒ってない。少し苛ついただけ。私の両親、あなたみたいに質の悪いホステスのせいで離婚したから」

「へえ」

「8才の時のことだし、もう全然忘れてたんだけど、あなたがあんまり軽い調子で言うから」

「そうなんですか。じゃ、もうやめます。外で主婦のホステスに声かけるの」

それからしばらく、わたしと里美さんは無言で歩き、路地に入ったとき、里美さんが不意に口を開いた。

「どうして、カミヤマって人のこと訊いてきたの？ママに頼まれた？」

「いいえ。わたしの問題です」

「本当に？一応、あの人も常連だったでしょ？」

「ママも嫌がってましたよ。里美さんしか指名しないし、他の子とは喋らないし。それに、ママならそういうこと、直接言いますよ」

「そうね」

頷いて、里美さんは憂鬱のこもった溜め息を宙に吐きだした。

「嫌になるなあ。この仕事はじめてから、疑ってばかり」

「疑ってすむなら、愛情はいらない」

ぼつりと、わたしは呟いた。

「なにそれ？」

「知らない。楓さんがこの前、酔っぱらって叫んだんです。“疑ってすむならなあ、愛情なんていらねえんだよ！！”って。隣のおじさんの胸ぐら鷲掴みにして」

「へえ。楓が」

「似合いませんよね、愛情なんて」

「ほんと」

クスクスと笑いあって歩いているうちに、お店のビルの前に着いた。

ビルに入る前に見上げた空は、ぼんやりと青紫に光っていた。

エレベーターが降りてくるのを待っていると、おーい、と呼ぶ声があったので、わたしと里美さんは同時に振り返った。

声の主は、噂の楓さんだった。

「待って、待って、そのの2人」

楓さんは叫ぶと、カツカツカツとヒールを鳴らして、アンバランスに走ってきた。

「急がなくても、まだ降りてこないよ」

里美さんが言うのも聞かず、楓さんは息を切らして、エレベーターの前まで来た。里美さんと楓さんは同じ年で、仲が良い。楓さんは、誰とでもざっくばらんに付き合えるタイプの人だから、わたしともたまに飲みに行ったりする。わたしが店内でまともに会話をするのは、ママと楓さんだけだった。

「時間大丈夫だよな？あー、あせった。寝坊した」

かすれ気味の声で言うと、楓さんはせいぜいと、肩で息をした。

「駅から走ってきたんですか？」

膝に両手をつけて屈んでいる楓さんに、わたしは訊いた。

「時計みれば良かったのに。まだ全然余裕だよ」

里美さんは言い、優しく楓さんの背中を擦った。そして、これ飲む？と言って、コンビニで買った烏龍茶を差し出した。

「ありがとう、ありがとう。あー久しぶりに走った」

ペットボトルの蓋をパキパキ回しながら、楓さんは言った。

それと同時に、エレベーターが到着した。扉が開くと、従業員の男性二人が看板を台車に乗せて、立っていた。

3人一緒に、おはようございます、と挨拶する。従業員の2人は頭まで下げて丁寧に、おはようございます、と声を揃えて返してきた。

2人が台車を出すのを待って、わたしと里美さんと楓さんの3人は、エレベーターに乗った。

「ん？そういえば珍しいね。無口の2人が一緒なんて、ねえ？」

手のこうで口元を拭いて、楓さんが里美さんに言った。

「たまたまコンビニで会ったの」

「へえ。あ、これありがとう」

楓さんは、半分残った烏龍茶を里美さんに返した。

「唯もはつきりしてるねえ。ママとウチのNO.1としか喋らないなんて」

「別に。みんなが避けてるだけじゃないですか」

素気なく、わたしは言った。唯は、わたしの源氏名だ。

「やだっ、怒らないでよ！冗談だっ！」

はっはっはっと豪快に笑いとばし、楓さんはわたしの肩をばしっくと叩いた。

「あんまりからかうと、クビになるよ。唯は、ママのお気に入りだから」

悪戯に微笑み、里美さんが言った。

「え？そうなの？ごめんねえ、唯ちゃん」

面白そうに楓さんは言い、わたしの肩を撫でようとした。が、その瞬間、エレベーターが止まり、目の前にフロアが広がったので、楓さんはその動作を止めた。

まだらに一步

フロアの真ん中では、眉間に皺を寄せたママが腕を組んで、立っていた。

「楓さん、さっきママに何言われたんですか？」

週刊誌をぺらぺらめくっている楓さんの隣に腰を下ろして、わたしは訊いた。楓さんの正面では、里美さんが丸椅子に座って静かにコンビニの弁当を食べている。

「うん？」

と、楓さんはわたしの方をみて、答えた。

「あー、タレコミだよ、タレコミ。この前、唯と飲みに行ったときに隣に座ってたハゲが、うちのお客の友達だったらしくてさ。あたしが胸ぐら掴んで、うらーってやったのを、その友達に喋ったらしいのね、ハゲが。で、その友達の人のご親切にママの耳にまで届けられて、まあ、今回は嚴重注意ってことなんだけど、しかし何であたしだってわかったのかなあ、その友達」

楓さんは一気に喋って、わたしの顔をじっと見つめた。

「わたし、何も知りませんよ」

眉を寄せて、わたしは言った。

「そうだよねえ。あー別に疑ったりしてないから」

サバサバと楓さんは言って、わたしから視線を外した。

「ハメる価値すらないもんね、楓なんか」

お弁当のゴミを捨てるために立ち上がった里美さんが、にっこり微笑んで、言った。

「うわっひどっ。言っとくけどね、あたし、この店では一番長いのよ」

「へえ、そうなんですか」

と、わたし。

「3年だっけ？前の店長の時からいるんだよね。でも、自慢にはならないよ」

里美さんは、丸椅子に戻ってくると、セブンスターを取りだし、

口にくわえた。

控え室は既に、煙が充満していて、わざわざ吸わなくても、十分不健康になれる。

「うん。あー懐かしいな、思い出すと。店長元気かなあ。あつ、ムシヨに入つてて元気ってこともないか」

楓さんは、自分で言ったことに、はっはっはっ、と笑った。

「ムシヨ？」

里美さんが、眉を寄せて聞き返した。

「そう、ムシヨ。詳しくは知らないけどさ、なんか詐欺と傷害で2、3年くらつたんだつて」

楓さんは言つて、お客からもらった名刺をバツクから取りだし、1枚1枚、眺めはじめた。楓さんが椅子の上に置いた週刊誌は、いつの間になくなっていた。控え室にあるものは、みんなのもの。紛失物が出た場合は、ちゃんと管理していない本人の責任。

「いいの？そういうこと、ぺらぺら喋つても」

灰皿に灰を落としながら、里美さんは言った。

「もう時効でしょ。あと半年ぐらいしたら、店長戻つてくるみたいだし。あつ、今日火曜日か。村本のおじさま来るかな」

「誰？村本つて」

「うわっひつどーい。あたしを娘みたいに想つてくれるおじいちゃんを」

「ああ、あの人。私、説教臭くて好きじゃないんだよなあ。こんな所でいつまで働く気にいるんだ、つて言われてもねえ。怒ることで、若い子に好かれようとしてるの見え見え。でも、人生最後のひと花がホステスとのエッチなんて寂しいよね。ねえ、唯」

煙草の火をを灰皿でもみ消し、里美さんはわたしの方をみて、にこつ、と笑った。

「そうですね」

わたしは、愛想笑いを里美さんに返して、楓さんに話し掛けた。

「前の店長、お店に戻ってくるんですか？」

「しらない。でも、戻ってきたら、いまお店にいる女の子たち、ほとんど辞めちゃうだろうなあ」

過去を振り返るような哀愁ある口調で、楓さんは言った。

「そんなに違うの？」

里美さんが訊いた。

「ちがうよー。店長はがん指名にノルマ課してくるし、制服なんてもう、裸にエプロン？例え古いかな？あははっ」

愉快そうに、楓さんは笑った。

「ママはお水の方の人だから、上品にやってるけど、店長のはもう、完全にキャバクラ。里美も唯も、覚悟しときなさいよー」

「私は辞める。そんなに変わるなら。ここに来たのだって、ママに誘われたからだし」

里美さんは、眉を寄せて言った。

「まー里美はどこでも上手くやれるしね。唯はどうする？もし、店長戻ってきたら」

「わかりません。わたしは、行く所も帰る所もないし。楓さんは？わたしは、冷めた口調で言った。

「あたしは残るよ。行くところも、帰るところも、恥じらいもプライドもないからさー。好き好んだ人生生きてもつままないしね」

里美さんが、少し驚いた顔をした。

「嫌いな？この仕事」

里美さんの問いに、楓さんは、あっはっはっ、と笑って足をくんだ。

「あたしさあ、好き嫌いで考える頭ないんだよ。まあ、だから向いてはいるんだろうけどさー、この仕事。どんなお客でも、どんなことされても、だいたい大丈夫だから。変でしょ、あたし。でも、寛大とか懐が深いとか思わないで。たまにどうでもいいことでキレたりもするからね」

楓さんはそう言って、わたしの方を見て、にやっ、と笑った。

そのとき、控え室のドアをノックする音がして、ギィッと、金属

が軋む音が続いた。

「皆さん、時間でーす」

従業員のやわな声が響いて、控え室の空気が、ざわざわと動きだす。

楓さんと里美さんが立ち上がり、わたしも続いて立ち上った。

立ち上がると、煙草の煙りと匂いが濃くなって、めまいに似たものを覚える。

わたしは、新鮮な空気を求めて、控え室から出た。

8・賭ける奇跡

ビルから出ると、空気が生ぬるく湿っていた。雨の予兆。息を吸い込むと、微かに雨の匂いがする。見上げると、隙間なく灰色の雲を敷き詰めた夜空が、地上の光を反射して、ぼんやりと光っていた。「あー終わった終わったあー」

背中から、楓さんの声がした。肩越しに振り返ると、楓さんは両手をあげて体を伸ばし、ううーん、と唸っていた。

「やだなあ、雨降るのか…」

そう呟いて、里美さんがわたしの隣で溜め息を吐く。

わたしもつられて、溜め息をこぼした。

外に出て、夜風に触れても解放感はなく、意識を縛っていた緊張の糸だけがゆるりと落ちて、ほんの少し心が安らぐだけだ。

安らぐといっても、断続的な緊張のなかで、“ほっと一息つく”程度のもので、帰ってまた眠りから覚めれば、その瞬間に意識は緊張の糸に縛られる。わたしの心に完全な安息が訪れることは、滅多にない。人生の中で安息を感じられたのは、彼がそばに居たときだけだった。

「今日もこなかったね、カミヤマさん」

里美さんが、不意に口をひらいた。わたしと里美さんは並んで歩き、楓さんはわたし達から少し離れて、ふらふら歩いている。

わたしは、視線を地面に落とした。

「だーれー？カミヤマって」

バランスをとるように両腕をあげて歩いている楓さんが、声をあげた。静寂が呼吸するように、夜の空気は声を響かせる。

「楓には関係ないよ」

と、素気なく里美さんが返すと、あーそう、と楓さんは黙った。

いちいち説明するのが面倒だったわたしは、何も言わなかった。

「ま、私は来てくれない方がいいんだけど」

「わたしも、お店には来てほしくはないです。でも、いまは一目みるだけでもいいから……」

疲労と酔いで感情が高ぶっているのか、わたしは涙声になって、言葉をつまらせた。

里美さんは、何も言わなかった。楓さんは、聞こえていないフリでもするように、鼻唄を歌っている。

「よくある話ですよ。迎えにくるなんて、口が動けば誰にでも言えるし」

すべてを振り払うように、わたしは気丈に言った。

「そうね」

と、ひとこと里美さんは言って、セブンスターを取りだした。

「里美い、あたしにも1本ちよーだい」

言いながら、ふらふらと楓さんが寄ってきた。

「乞食みたい」

クスツと鼻で笑い、里美さんはもう1本、セブンスターを取りだして、寄ってくる楓さんに差し出した。

「唯、火いっつ」

セブンスター受けとるなり、楓さんはわたしを見て言った。

わたしはライターを取り出して、火をつけた。

楓さんが、くわえた煙草の先をライターにつきだす傍らで、里美さんは、自分で火をつけている。

煙草に火がつくと、楓さんはキラリと殺気に光る眼でわたしを見た。

「唯、女々しいのは、あたし許せないんだわ。嫌いじゃないよ。でも、苛々するなあ」

楓さんは言って、歪んだ笑みを浮かべた。

「すみません」

謝るわたしの横で、里美さんが煙を吐いた。

「里美も、なんか言ってやれ」

そう言い残して、楓さんはふらふらと離れていった。

わたしが里美さんの方を見ると、里美さんは、右手の指先に煙草を挟んで夜空を見上げ、目を細めて上空にある何かを見つめた。「強がらなくても、待つかどうかは唯の自由なんだから、死ぬまで信じる気であるなら、それでもいいんじゃない」

「死ぬまで…ですか」

「それくらい信じないと、奇跡は起こらないよ。信じても起きないときは、起きないんだろうけど。でも、何かに賭ける人生って、それだけで意味があるような気がする」

「里美さん…酔ってますか？」

離れたところで、楓さんが、あっはっは、と大声で笑った。それに呼応するように、何処かで犬が吠えた。

「犬か、あたしは！」

叫んで、楓さんはひとりで大笑いした。

「楓も酔うと馬鹿になるのね。終わったあと、一緒に帰るなんて滅多にないから、知らなかった」

里美さんは言い、煙を吸い込んだ。

「楓さんって、もとヤンですか？さっき、眼が怖かった」

「さあ？違うと思うよ」

答えて、里美さんは、ふーっと煙を吐いた。

「あつ、でも1回、控え室で着替えてるとき、体に痣があったかなあ。でも、あの様子じゃ、酔ってどっかにぶつけたんだらうね」

ガシヤンと音をたて、ゴミの山に突っ込んでいる楓さんを見ながら、里美さんは言った。

「くさっ！野良か、あたしは！いや、乞食だっ！」

「痣って、どんな痣ですか？」

「どんなって…痣は痣だよ。殴れたか、ぶつけたか」

「ふーん」

わたしは頷いて、ゴミと戯れている楓さんを見た。

「楓、置いてくよー！」

里美さんの呼び掛けに、楓さんは名残惜しそうな顔でふらふらと

ゴミから離れた。けれど、少し歩いた所で電柱に抱きつき、そのままぺたんとオシリをつくつと、楓さんは完全に動けなくなった。

「ああ、もう駄目だね。タクシー呼んでくるから、見てくれる？」
わたしが頷くと、里美さんは早足で通りへ向かった。

わたしは、楓さんの正面にしゃがんで、ぺしぺしと頬を叩いたり、ぎゅっとツネったりして、里美さんを待った。楓さんは、死んだように、ぐーぐーとイビキをかき、眠っている。

2分ほどして、里美さんがタクシーに乗って、戻ってきた。

タクシーから降りるなり、里美さんは楓さんの頬をパーンツとおもいつき叩いた。わたしが叩いたのより、何十倍もの強さで。それには、さすがに楓さんもうっすらと目を開けた。

「楓、タクシー乗って。送ってくから」

里美さんは言い、楓さんの腕を引つ張って、立ち上がらせた。楓さんは、夢遊病のようにのろのろと、タクシーに乗り込むと、すぐにぐーぐーと寝息をたてた。

「唯は、大丈夫？」

散乱したゴミから、楓さんのバックを拾ってきた里美さんが、訊いてきた。

「大丈夫です」

わたしは、答えた。

「そう。じゃあ、気をつけてね。お疲れさま」

里美さんは笑みを浮かべて言うと、タクシーに乗り込んだ。

「お疲れさまです」

わたしが言うと、見計らったように、タクシーのドアが閉まった。中から、里美さんが行き先を告げる声が、くぐもって聞こえてきたのと同時に、タクシーはUターンして通りに向って走りだした。

わたしはそれを見送り、タクシーが遠くで左折して視界から消えるのを待って、歩きはじめた。

完全な静寂の中に、足音だけが響き、追いかけてくる。わたしは何度も振り返り、そこに誰もいないことを確認してから、歩き出す。

空から、ぼつりぼつりと、雨が落ちてきた。見上げると、一粒の雨が額に落ち、滴が跳ねたので、わたしは両眼をぎゅっと瞑る。すると、その瞬間に雨が強さを増し、静寂の世界は、雨音の中に消えた。わたしは、濡れるままにびちゃびちゃと足音をたてて、帰路にいった。

まだ小さかったとき、わたしはどんなに歪で破壊的で絶望的な親子の間にも、無償の愛が存在すると信じていた。わたしはあの女を恨み憎しみながらも、心のどこかであの女の愛を求め、またあの女がわたしを愛してくれているという儂い夢を見ていた。いつか世界は変わると、淡い希望を抱いていた。

無償の愛を知らない心は、例えそうと気づいていなくても、ずっとそれを求め続けて人生をさ迷い続ける。

わたしが彼を断ち切れない理由はつまり、彼がわたしに対して無償で接してくれてくれたからだ。

そこに愛があったかのかは、わからない。例えなくても、わたしが強く愛せば、埋め合わせはできると思っていた。ふたりの距離を縮めることは出来ると、信じていた。

でも、いまではすべてが甘い幻想だったような気がする。わたしが愛しても求めても、彼は変わらなかつただろう。わたしがいまでも、あの女を許せないのと同じように。

それでもわたしはまだ、諦めることができない。

楓さんが、店にこなくなつた。

ママは特に気にする様子もなく、里美さんもあまり関心がないようだった。

わたしは、そんな2人に冷めた感情を抱いたので、楓さんと仲がよい先輩の人と話してみることにした。

理由は知らないけれど、その人はわたしと距離を置きたがっていた様子だったので、普段はわたしも意識的に避けるようにしていた。わたしが嫌い、というよりは、怯えている、という感じだった。

閉店後、わたしはその先輩のあとをつけて、お店から十分離れたところで、声をかけた。

驚いた顔をして、逃げようとする先輩の腕を掴み、わたしは言った。

「逃げないでください。楓さんのこと、何かしりませんか？」

「え、なに？」

弱々しい声で、先輩は聞き返した。

「楓さんのことです。急にこなくなったから、気になって」

「え、ああ、なんだ、楓のこと」

先輩は安堵したようにホッと息を吐いた。わたしは訝しく思ったが、何も言わなかった。

「知らない。わたしにも、わからないの。連絡しても、反応ないし」

「そうですか。じゃあ楓さんの自宅、どこかわかりますか？」

「わかるけど、オートロックのマンションだから中には入れないよ？」

「そんなの、どうにでもなります。教えてください」

わたしは言って、道路際にたつてタクシーをとめた。

その人は溜め息を吐き、諦めた様子で運転手に住所を告げ、わたしをみた。

「607が、楓の部屋。人のことに、あまり深く関わらない方がいいと思うけど」

そう言って視線を落とした先輩に頭をさげて、わたしはタクシーに乗り込んだ。

「唯、何してんの？」

玄関で、607をしつこく呼び出し続けていると、背後から声をかけられた。

振り返ると、不思議そうな顔をした楓さんが佇んでいた。

「あ、えっと……」

あまりにあっさり会えたので、わたしは少し拍子抜けした。

「楓さんこそ、どうしたんですか？急にこなくなつて」

「あーなに？心配してきてくれたの。いや、別に何にもないよ。田舎に帰つてただけだから。里美に訊かなかつたんだ」

そう言つて、楓さんは笑つた。

「訊きました。でも、知らない、つて」

わたしはぷーつとふてくされた。

「ははっ。面倒だつたんだろうね、話すのが。ママにもちゃんと言つただけ、ママには訊かなかつたの？」

わたしは頷いた。

「そつか。じゃあ唯にも言つとけばよかつたね。そんなに心配するとは思つてなかつた。ごめん、ごめん」

「いいです、別に」

素気なくわたしは言つて、腕を組んだ。

冷気を孕んだ夜風が吹き、眠気から意識を呼び戻す。楓さんに会えたことで気が緩んだのか、わたしはキツイ眠気に襲われていた。

「じゃ、帰ります」

「お店には、明日から出るつもりだから。悪かつたね、ホントに。こんなところまで」

楓さんの声を半分夢心地で聴きながら、わたしはふらふらとマンションから出て、道路際に立つた。

翌日も、楓さんはお店に来なかつた。里美さんに聞いてみると、知らない、と答えたので、昨日楓さんから聞いたことを話した。すると里美さんは驚いた顔をして、

「わたし本当に何も知らないよ。楓、なんでそんな嘘ついたんだろ」と言つて訝しげに眉を寄せた。

そして次の日、とうとう、楓さんのロッカーは片づけられ、新入りの女子大生が入つてきた。

「1週間も無断欠勤なんて、戻ってきてもクビよ」
従業員とフロアを歩いていたママが吐き捨てるのを、わたしは聞いた。

「いい？楓がきても、追いつきなさいよ」

と、従業員に言つてママはキッチンの方へ消えた。

わたしは従業員のの人に、楓さんが来たら教えて、と頼んで待機椅子に座った。

新入りの女子大生は、レズだった。わたしは気に入られたらしく、しよつちゆう体を触られる。里美さんに話すと、よかったね、と冷やかされた。

閉店後、女子大生を呼びとめて、興味が無いから、と告げたところ、かなりうるたえた感じで、ごめんなさい、と恥ずかしそうに足早に去っていった。

次の日から、女子大生は来なくなった。

「あなたがレズだつて変な噂がながれてるけど、本当なの？」

里美さんの言葉にシーンと控室が静まり返った。わたしの頭には、すぐに女子大生のことが浮かんだ。

わたしが控室を見渡すと、みんな顔をうつ向いて、顔を伏せた。

女子大生は、辞めて正解だ。こんな連中相手に、いちいち傷ついていたら、やっていけない。

わたしは、隅の方で丸椅子に座っている、楓さんと仲の良かった先輩のところまでツカツカと歩いて、うつ向いたまま固まっている先輩を見下ろした。

「くっだらない」

怒りを込めて吐きすて、先輩の頭を叩いた。先輩は頭を抑え、泣きそうな顔でわたしを見上げた。

「私は…、べつに、なにも…」

途切れ途切れの音が、涙声に変わる。わたしは思いつき先輩の頬を叩いた。パンツと乾いた音が、控室に響く。

先輩は頬に手をあて、ずずつと鼻をすすった。

「くだらないって言ってるの、聞こえた？」

今度は反対の頬を叩く。乾いた音が響いた一瞬後に、先輩が立ち上がって逃げようとしたので、わたしは足を払った。

先輩は派手に転倒し、体をしたたか床に打ちつけ、うめいた。

「あんまりくだらないと、殺したくなるんだよ」

倒れた先輩の頭の近くにしゃがんで、髪の毛を掴む。

「痛いっ」

「痛いの。じゃあ、どうしてほしい？」

「離して…、許して、もうなにもいわないから…」

「離して許してもうなにもいわないから」

わたしは先輩の懇願を無感情に反芻して、髪の毛を掴んだまま立ち上がった。先輩の上体が持ちあがり、指にからまった髪が数本、ぶちぶちと鈍い音をたてて、頭皮から剥がれる。

「痛い痛い痛いっ！！」

先輩の叫びは、悲鳴に近かった。

手を離すと、どさり、と先輩の上体は床に落ちた。頭を抱え、イモムシのように体を曲げて痛がる先輩を見下ろしていると、怒りが虚しさへと変わっていった。

怒りはすべてを消耗させる。体力も、精神も、思考力も、全部。

休みたい。短いあいだに、衝撃と負担の強いことが色々起こりすぎた。

彼の失踪、楓さんの嘘、女子大生のこと、そしていま。

まるですっかり充電できなかった電池のように、わたしの精神は極端にハイとロウを行ったり来たりしている。自分の感情に振り回されて客観的になれない、危険な症状。

すべてが面倒になり、わたしは先輩が座っていた丸椅子にちから

まだらに一步

なく腰をおろし、途方に暮れた。

帰宅すると、留守電にメッセージが2件入っていた。

1件目は数秒間をおいて無言で切れ、2件目は姉さんからだった。久しぶりに会わないか、という類の連絡だったので、すぐにメッセージを消した。

姉さんが嫌いなわけではなく、姉さんと会うと、嫌でもあの女のこと頭浮かんできてしまうので、極力姉さんとは会わないようにしていた。

あの女に対する怒りで精神を消耗させることほど、愚かなことはない。過ぎた過去に対して、怒りや憎しみを覚えるということとは、別れた恋人のことを未練たらしく想うことと変わらないから。

わたしは彼に対する想いを引きずりながら、もう一方では過去を完全に断ち切ろうともがいていた。

ふたつのことが、コインの表と裏のように、ひとつの現実として繋がっていると知りながら、わたしはその片方だけ、引き剥がそうとしていた。

憎しみがなければ、愛するという行為は、浅さかで薄っぺらく軽いものでしかなくなる。愛があるから、憎しみが際立つのと同じように。

それでもわたしは、いまこうして自分が存在していることが、あの女の行為を肯定しているようで、許せなかった。

あの女との関わりすべてをはっきりと断ち切ることで、わたしはあの女を否定したい。

あの女の存在を認めることはつまり、わたしがあの女と同じことを繰り返すという余地を、残してしまうことにも繋がるから。

わたしと姉さんは、自分の愛を犠牲にしても、あの女との繋がりを断ち切らなければいけない。そういう宿命のもとに、わたしたち姉妹は生まれてきたのだから。

「唯、ちょっとママ呼んできてくれる？」
控室の椅子に座って夕刊をひろげていた里美さんが、紙面に視線を落としたまま言った。

昨日のこともあって、わたしか里美さんが口をひらくと、控室はしんと静まる。運の良いことに、先輩は今日は欠勤日だった。そうじゃなくても、出てこなかったらどううけれど。

「どうしてですか？」

わたしは訊き返した。

里美さんは顔をあげてわたしを見ると、夕刊を折りたたんで、ひとつの記事を指差しながら、わたしに夕刊を差し出した。

里美さんが指差したのは、【都内マンションから遺体】という、よくある記事だった。

「これが、なんなんですか？」

眉を寄せてわたしは言った。

「よく読んで。遺体の身元のところ」

里美さんに促され、わたしはふたたび記事に視線を落とした。

【都内マンションから遺体】

18日未明、友人が浴槽で死亡していると通報があり、巡回中の警察官2名が現場に駆けつけたところ、女性が浴槽の中で血を流して倒れているのを発見。

その後、救急隊がすぐに駆けつけたが、女性はすでに死亡していた。

死亡した女性は、現場の部屋に住む上野明菜さん（24）元ホステスとみられ、警察は死因の特定を急いでいる。

発見時、上野さんは全裸で、全身には殴られたような痣がいくつもあり、警察は強姦、もしくは強盗を目的とした殺人事件として捜査を開始。

また警察は同時に、通報してきた上野さんの友人とみられる女性の行方も追っている。

「元ホステスって…この人、うちの店の人ですか？」

紙面から顔をあげずに、わたしは言った。

それを聞いて、静かだった控室が、ざわつきはじめた。

「唯、知らないの。上野明菜って、楓の本名よ」

里美さんがあまりに冷静に言ったので、わたしは現実を把握するのに時間がかかった。

ようやく現実が飲み込めたとき、わたしの正面に座っていた女が夕刊を奪い取り、そこにみんなが飢えたハイエナのように群がった。

「うっそー！ヤバイヤバイ、ホントに楓だ！」

誰かが、興奮気味に声をあげた。

「どれ？どこ？見せてよ！うわっホントだ。ヤバーイ」

と、別の声。

「ワイドショーとか来るかもね」

「この友人って、冬実じゃない？アイツなら、逃げるよ絶対」

冬実とは、あの先輩のことだ。楓さんと仲が良かったのだから、可能性は高い。

みんなが騒ぐのを呆然と見つめていたわたしは、里美さんの言葉の意味をやっと理解して、はっとなってママを呼びにいこうと立ち上がった。

けど、その瞬間にドアが開き、眉間に皺を寄せたママが従業員を1人連れて、控室に入ってきた。

ママの登場に控室はまた、しんと静まり返った。

ママは夕刊にたかっているみんなを睨み、わたしと里美さんに視線をやってから、ひとつ息を吸って口を開いた。

「みんなもう知ってるみたいだから、手短に言うわ。わたしはこれから警察に行くけど、みんなはいつも通り、接客して頂戴。事件のことが話題になっても、面倒だから楓のことは絶対に口に出さない

で。わかってるわね？それから、今日はみんなに話さなきゃいけないことがあるから、終わったたら、フロアに集まって」

「ママ、タクシー着ました」

ママが言い終わったのと同時に、従業員が控室のドアを叩いて、外から言った。

「じゃあ、みんなお願いね」

そう言い残して、ママと従業員は控室から出ていった。

控室がまたざわつきはじめた。中には、いまになって泣きはじめる人も数人いる。

わたしは、涙こそでなかったけど、心は悲愴的な虚無感に襲われていた。

「いつも通りなんて、無理ですよ。いつそのこと、休んじやえばいいのに」

気落ちした声でわたしは言った。

「楓が現役だったら、そうしてたかもしれないね。でも、いまはお店とは関係ないから、仕方ないよ」

冷静に里美さんは言うつと、セブンスターを一本取りだし、すいはじめた。

「里美さんは、ショックじゃないんですか。楓さんと、仲良かったのに」

「だいたい予想してたから。楓が、DVの彼氏と付き合ってることも知ってたし」

里美さんは言うつて、煙を吐いた。

「なんですか、それ。じゃあ、楓さんを見殺しにしたんですか」

わたしは棘々しく言った。けれどわたしの言っていることは、まったく的外れだった。

「そうね、見殺しかもね。でも、じゃあ唯ならどうにか出来た？楓と同じように依存を断ち切れないあなたに、楓が救えた？」

わたしは、何も答えられず沈黙した。里美さんの言う通りだった。わたしは、でもだから、楓さんのことが気になっていたのだろう。

似ていたのだ、わたしと楓さんは、何処か。

「依存する人っていうのは、それが正しいとかじゃなくて、そうしなきゃ生きていけないの。だから結局、他人にはどうすることもできない。楓も、それはわかっていたと思う。だから、それを断ち切るためには、死ぬしかなかったんじゃないかな」

「でも、楓さんが死んでも、その彼氏が繰り返したら、同じじゃないですか」

わたしは言った。

「楓が断ち切りたかったのは、楓自身の依存だよ。楓は頭が良いから、人のことをどうにか出来るなんて、考えなかったと思う。彼を救うために死んだんじゃないよ」

「死んだら、何にもならないのに。おかしいですよ、そんなの」

「生きてても、どうにもならないなら、選択はひとつしかないよ。」

依存を断ち切って生きるより、すべてを断ち切る方が楽なもの」

里美さんは煙を吸いながら、宙を見つめて静止した。

「変わるかわわらないかなんて、その人次第。見てる側が投げ出すのは自由なのに、当人は目をそらしちゃいけないなんて、理不尽よ。死にたいなら、死なせてあげればいい」

わたしは黙り、里美さんとの間に沈黙の壁が出来上がった。みんなは、いつも通りそれぞれ、開店の時間が来るのを待っている。泣いていた人たちは、祈るような顔でメイクをなおしている。楓さんの死は、ここにいる人達には何も残さず、何も与えなかった。

楓さんを殴り殺した彼氏と、楓さんの死体を発見した先輩には、永遠につきまとうであろう死の影。断ち切りたくても断ち切れない血の繋がりのように、楓さんの死は、2人の心に根をはり、やがて蝕んでいく。

わたしが楓さんの死を忘れた頃に、まだそれを引きずり苦悶する人間がいる。そう考えると、不思議な感じがした。

楓さんの死に意味を求めるとするなら、2人の人生がそれに直結することになる。誰かの死が、世界にとって絶対的に無意味である

ことなんてない。でも、それでも世界は変わらない。妙な話だなと思う。

「ママの話って、何でしょうね」
わたしは、沈黙の壁を壊した。

「知らない。でもきつとろくなことじゃないよ」

宙を見つめたまま里美さんは答えると、煙草を灰皿でもみ消し、立ち上がった。

11・無償の愛

夜明け前の公園に、わたしと里美さんは来ていた。砂場に滑り台、それとブランコしかない小さな公園で、頼りない外灯の光が、さらに公園を狭くみせていた。

砂場には空き缶や置いてけぼりのスコップが転がり、滑り台の上では週刊誌がパラパラと夜風に吹かれていた。砂を踏み公園を歩いていると、まるで時代に取り残され、錆びついた空間にいるようだった。

わたしはブランコに立って乗り、里美さんは寒そうに缶コーヒーを握りながら、座った。

仄暗い空を見上げると、遠くに丸い月がぺたんこと張りつき、影のような雲たちは、ゆっくりと空を流されていた。

「唯はどうするの？これから」
小さくブランコを揺らしながら、里美さんが不意に訊いてきた。「とりあえず、休みます。2週間ぐらいなら、何もしなくても平気なんで」

わたしは答えた。でも、もっと休むかもしれない。いまはもう、何をやる気力も湧かなかった。

「里美さんは、どうするつもりなんですか？」

「さあ…どうしようかな。ママがよそでお店やるなら、手伝いたいけど」

里美さんは言って、缶コーヒーを頬にあてた。

閉店後、ママはフロアに集まったみんなに、来月からお店がリニューアルすること、前店長がお店に戻ってくることを告げた。

前店長はママの内縁の夫で、はじめから、夫が戻ってくるまでの間だけ、ということでもママはお店を預つたらしい。その間お店をどうするかは、ママの自由だった。だから、ママは今月でお店を離れる。

里美さんのようにママに誘われて入ってきた人達が、お店に残る気になれないのは当然だ。

ママは、お店に残る気なら別のお店で働くぐらいの覚悟をしなさい、と真剣な口調でみんなに言った。

楓さんが言っていた通り、ママと前店長とでは、何もかもが違うみたいだ。

「なんだか野良犬みたいね、私たち。夜中に公園で途方に暮れて」
小さく笑みを浮かべて、里美さんは言った。

わたしは、いつか酔っ払って、ゴミの山に突っ込んだ楓さんを思い出した。

「野良犬っていうより、捨て犬ですよ。戸惑ってばかりで、ただお腹を空かせている」

わたしはブランコから、とんつ、と飛び下りた。ジャリツと砂の擦れる音がする。

「はじめから野良犬だったら、もっと強く何の希望も持たずに生きられたかもしれない。捨て犬は惨めですよ。弱いクセに、強さがなければ生きていけない宿命を背負わされる」

「楓のこと、言ってるの？」

里美さんは言って、首を傾けてわたしを見た。

わたしは、頭を振った。

「自分のことです」

里美さんは、そう、と一言頷いて、視線を夜闇に霞む公園にやった。

わたしは、右手をあげて腕時計をみた。4時10分。夜明けは、まだ来ない。

一週間が過ぎた。お店を辞めて、何もすることがなく自由になったわたしは、姉さんと喫茶店で会った以外はどこにもいかず、部屋に引き籠っていた。外に出ている間に、彼が戻って来やしないかと

いう懸念に取り憑かれて、わたしは身動きがとれなかった。眠ることも怖かった。

それに最近では、彼はもう戻ってこないかもしれない、という不安に加えて、戻って来たら来たでどうなるのだろうかという、虚無的な不安にも襲われていた。

一週間の間に、わたしはすべてに対して絶望的になり、精神は樹海の暗闇の中で消耗し続けていた。

いままでは、彼と生きることとで心の闇は晴れると希望を持っていた。けどいまでは、その希望は樹海の木の隙間から射す細い光のようで、わたしはそこに期待も救いも見ることが出来ない。

わたしはもう、彼に執着して生きていくといよりは、生きる為に彼に執着しているようだった。

死ぬまで生きるしかない人生をどう生きるか。恋や愛の中で、執着や依存が否定されていることが、わたしにはもう理解出来ない。否定は可能性を潰し、肯定は惰性を生む。人はきつと、それが何の穴なのかわからなくても、とにかく埋めていかなくは、生きていけなくなってしまうんだ。

落ちて汚れることを極端に嫌う。平坦な道が好きなのではなく、平坦な道しか歩けない。

わたしはどこまでも堕ちていく覚悟でいたけれど、わたしが堕ちた穴を他の誰かが埋めてしまうことも有り得る。でも、そうやってわたしのような人間は消えていくんだ。救いはひとつだけ。消えていくモノに対しては、人々が無関心であるということ。

このまま、ベットに沈んだまま、瞳を閉じた瞬間に死ねたら、幸せなのに……。

重く気怠い体を無理矢理引っぱってマンションの玄関まで下りると、ママが見知らぬ男と並んで立っていた。

男はサングラスをしていて、髪は坊主に近いぐらい短いああげら

れていた。それだけで、その男が誰であるかは、すぐにわかった。「ひどい格好ね」

ママは微笑を浮かべて言うと、指に挟んでいた煙草を男に渡した。男は煙草を口にくわえると、煙を吸い込んだ。

ずっと引き籠っていたわたしの頭はとろくなっていて、何か喋ろうとしても言葉が浮かんでこない。わたしは、だらんと垂らした左腕の肘を右手で掴んで静止し、視線を落とした。

「その様子じゃ、いまは何もやってないのね？」

ママの問いに、わたしはこくり、と素直に頷いた。

わたしは、白黒の横縞の長袖と、黒のジャージのズボンという、ほとんど寝巻きの格好をしていた。もう、どんな格好で外に出ても気にならなかった。

男がママの隣で、煙を吐いた。

「京子、コイツがお前が眼エかけてやったガキか？あ？」

男は、少し屈んでわたしの顔を覗いた。

わたしは反射的に顔を背けた。すっぴんを見られるのが嫌なのではなく、人に見られるのが恐かった。

「こつち向け、おい」

凄んだ声で男は言うと、わたしの顎を掴んで無理矢理、顔を正面に向けた。

「ちよつと、乱暴しないでよ」

ママが男の腕を掴んだが、男はママの手を振り払い、わたしの顎を掴んだまま、空いた手でサングラスを外した。

男の、殺気を孕んだ視線がじつとわたしを睨む。男が顎から手を離すまで、わたしは男から目を反らし続けた。

「ツラは悪くねえ。お前、いくつだ？」

「17よ。ねえ、手、離してあげて。怖がつてるわよ」

わたしが口を閉ざしていると、ママが代わりに答えた。男はフン、と鼻を鳴らすと、わたしの顎から手を離れた。

「京子、お前に任せる。お前が眼つけたんだろ。俺は先に帰るぜ」

男は吐き捨てるように言うと、背を向けて帰っていった。男が吐いた煙の匂いと沈黙が、わたしとママの間に残る。

「ごめんね、唯。あんな人だけど、頼りになるの」

ママが謝り、沈黙が消えた。わたしは口を開いたが、一、二言目はスカスカと口から空気が抜けただけで、声は出なかった。

咳ばらいをして、やっと出た声も、かすれて細く低かった。

「きょうこって、いうんですか。なまえ」

「ええ。知らなかった？」

「わたしはもう、唯じゃない」

頷いて、わたしは言った。

「そうね。でも、あなたにその気があるなら、また唯になれるわよ」

「いいんです、もう。これからは、普通に生きます」

わたしは言って、はじめてまともにママの顔を見た。ママは、一瞬寂しげな顔をしたが、すぐに笑顔を繕った。

「そう。そうね。その方がいいわ」

「はい」

わたしがひとこと答え、微笑を浮かべた瞬間、突然ママはわたしを抱き寄せた。

背が低いわたしは、ヒールをはいているママの胸元に顔を沈める形になった。

柔らかな感触と温もりが、伝わってくる。いままで感じたことのない、懐かしい感覚だった。凍てついていた心が、きゅっ、と暖かく締めつけられ、ほどけた途端にほかほかと溶けていく。

そのとき、わたしははじめて、愛情に抱きしめられた。姉さんにも、お婆ちゃんにも、あの女にも、彼にだって、感じるこのなかった感覚。

わたしは、目が潤んでいることに気づいて、涙をこらえた。

ママはわたしの腰と後頭部に手をまわして、何回も何回も、きゅう、きゅう、きゅう、と強く抱きしめた。

その度に、涙が溢れそうになった。

「あの人が捕まったとき、私は死んでやろうって思うぐらい、辛かったのよ。あの時、私は情けないぐらい弱かったから、何年もあの人を待つことなんて考えられなかった。あの人は、そんな私を見かねて、本当は友達に任せるつもりだったお店を私に託したの。私が生きることを投げ出さないようにする為に。でも、私がお店を続けられた本当の理由は、あなたなのよ」

ママはそこで話を切って、また強くぎゅぎゅとわたしを抱きしめた。

「あなたをはじめて見た瞬間に、私は感じたの。私はこの子を守る為に、いままで生きてきたんだって。だから、あなただけは何かあっても守る気でいたわ。私は子どもが出来ない体だから、尚更」

ママは、それからしばらくわたしを抱きしめ、わたしもママの胸の中で安らぎ、満たされた。

「もっと長く、あなたと過ごしたかった」

ママは最後にそう言って、わたしを離すと、そのまま振り返らず、街の雑踏へ消えていった。

また逢うことがあっても、そのときはもう、完全な他人だ。例えば、微笑みをかわしあうような懐かしさを覚えたとしても。

それでも、ママが与えた愛情はわたしの中に永遠に残り続ける。わたしはママが残した愛情に救われ、わたしが救われる度にママも救われる。

わたしは、はじめて心の片隅に愛情という逃げ場をもった。

12・幸せと死

真つ暗な浴室で、わたしは目覚めた。長い時間、不自然な体勢で眠ってしまったせいで、立ち上がると体の節々がポキポキと音をたてる。眠っている間、タイルに押しつけていた右側頭部は、触ると少しへこんでいた。

仄暗い廊下を歩き、姉さんの祭壇がある和室へと戻る。明かりがついたままの和室には、姉さんの夫はいなかった。

わたしは祭壇の前に膝を抱えて座り、両膝の上に顎をのせて、微笑している姉さんの遺影を見つめた。

いつ撮られた写真なのだろうか。最後に会ったときの印象と比べると、少し若く見える。わたしは写真が嫌いだけれど、姉さんはどうだったのだろうか。

そういえばいつか、姉さんが夫と抱き合っている写真を見た覚えがある。

まだ、わたしがあの女の家に行った頃。逃げ出す為に通帳や財布を探して家中の引き出しをあさっていたとき、姉さんの名が記された封筒を見つけた。中身は、婚姻届のコピーと一枚の写真だった。

半裸状態の姉さんと、見知らぬ男がベットの上で抱き合っている写真で、まだ純粹だったわたしにはショックの大きい写真だった。

でも、わたしはその写真と婚姻届のコピーを見て、家を逃げ出し、でも生きていけるといって、確証のようなものを得た。少なくとも、姉さんはまともに生きている。わたしにだって可能な筈だ、と。

そしてある日の夜、あの女が連れ込んだ男からお金を盗み、封筒の住所を頼りに、わたしは逃げ出した。人生を、自分の力で生き抜く為に。

「なんだ、起きたのか」

足音もなく、突然姉さんの夫が現れた。わたしは、姉さんの遺影から視線を離さなかった。遺影の姉さんは、誰に向かって微笑した

のだろう。

「この写真、いつ撮ったんですか？」

わたしは訊いた。

「さあ…わからないな。あまり写真を撮った覚えはないんだ。だから、由樹が友達に撮ってもらったものかもしれない」

姉さんの夫は言つて、和室の中へ入つてくると、膝を抱えているわたしの傍らに、どすん、と腰を下ろした。

「それより、さっきは悪かった。軽はずみなことを言つて」

「べつに。お互い様です」

無感情に、わたしは言つた。

すぐに謝れるところは、姉さんと似ている。でも、謝られるようなことを何度も繰り返されると、人はいずれは愛想をつかす。きっと、姉さんもこの人も、疲れたのだろう。愛するが故に、許さなければいけないことに。

「さつきみたいだな、うわべだけの優しさに救われる女性も、世の中にはいるし。でも、姉さんとわたしは違った。それだけの話です」

「俺は、由樹と君がどんな人生を送ってきたのか知らないからね」

姉さんの夫は、自嘲気味に苦笑した。

わたしは横目で姉さんの夫の横顔をみて、ふいつ、と視線を遺影に戻した。

「知つてたら、どうにか出来たんですか？」

「いや。でも、こうなる前に、別れていたかもしれない」

「無関係なら良かったってこと？」

わたしは、姉さんの夫に顔を向けて、冷たい視線を投げつけた。

「別の男なら、救えたかもしれないってことだ」

姉さんの夫は半ば投げやりに言うどわたしから目を反らし、右手で後頭部を掻いた。

「君の言ってることも、由樹のことも、さっぱりわからん。努力はしてきたつもりだ。理解する」

「別に、理解なんてして欲しくない。出来るわけないし」

こんどは、わたしが投げやりに言った。

わたしは、理解じゃなく、無償でいて欲しいだけ。無償でいれば理解なんてする必要はないということが、どうして解らないのだろう。

姉さんの遺影に目をやる。死はすべての命に無償でやってくるものなのに、姉さんは死に救いを求めた。でも、死に見返りを求めた人間の結末を、わたしは知らない。きつと永遠に知ることもない。

わたしは、口を閉ざした。

「君は、今夜はどうするんだ？泊まっていくのか？」

訪れる沈黙を察知したのか、姉さんの夫は話を変え、立ち上がった。

沈黙。指先で、畳を擦ってみる。ジャツジャツと、乾いた音。今度は爪をたてる。ガリツ、ガリツ。また、沈黙。そして静寂。わたしは沈黙を続けた。

「俺はこれからシャワーを浴びる。もし泊まる気なら、夕食は外で食べよう」

姉さんの夫はそう言い残して、和室から出ていった。

わたしは膝を抱えたまま姉さんの遺影を見つめ続け、やがて額を両膝につけて丸くなった。

夕闇の静寂の中にタイルを弾く水の音が、仄かに響いてくる。まとわりつく線香の匂いが、正気を遠ざけては、引き寄せる。わたしは丸まったまま、思考した。

死んだあと、人は魂だけになり、成仏する前にその一生をもう一度見せられると、小さい頃、お婆ちゃんから聞いたことがある。

もし本当なら、姉さんはいま、人生のどの瞬間を見ているのだろうか。姉さんの人生に、幸せな瞬間はあったのだろうか。

幸せになる権利は、誰にでも平等に与えられるけれど、誰もが幸せになれるわけじゃない。一瞬の幸せも感じられないまま、消える命だつてあるのだから。

姉さんは、どうだったのだろうか。自殺したことをそのまま不幸な

まだらに一步

人生とは捉えられない。幸せが災いして、不幸に墮ちることもある。宿った命が自殺を決意させたように。

わたしは、どうなるのだろう。

幸せを願ったこともないし、何が幸せなのかもわからない。死ぬまで生きること以外、いまは何も考えられない。それ以上のことがあるのだろうか。

13・優しさ

焼き鳥屋で夕食をすませたあと、姉さんの夫と別れて、タクシーに乗った。

別れ際に、姉さんの夫から合鍵を渡されたけれど、戻るつもりはなかった。

姉さんの夫は、わたしに対して優しくすることで、自分自身への償いをしようとしている。姉さんへの償いではなくて。

でも、本当は誰に対して償えばいいのか、どうすれば償いになるのか、わからないのだ。罪は犯したものが償うもので、今回罪を犯したのは、姉さんの夫ではなく、姉さん自身だから。

わたしが側にいると、どうしてもあの人は罪の意識を抱えてしまふから、わたしは姉さんの夫の側にいたくはなかった。他人ではなく、自分を許せない人の側にいると、こっちまで息苦しくなるから。わたしは、運転手に行き先を告げてドアにもたれ、流れていく街の光を見つめた。

タクシーがスピードをあげていくにつれて、光は尾をひき、余韻と残像を視界に残して消えていく。

夜を迎えたばかりの街は、1日の解放感と溜め息が混ざり合い、ほどよいテンションを保っているように見える。歩道から響く笑い声と追い越していく車から漏れるユーロビートのリズムが、殺伐と耳を叩く。

喧騒を縫うように、タクシーは夜の街を走り抜ける。満腹感と心地良い揺れが眠気を誘い、わたしはとうとうと重い瞬きを繰り返した。

タクシーが信号待ちをしているとき、わたしはとうとう睡魔の誘惑に負けて、浅い眠りに落ちた。

彼が煙草を買ってくると言ったので、わたしは歩道のガードレールにもたれて腕を組んで待った。

自販機へと歩く彼の背中を見つめていると、不意にどこからか声がした。

「おネエさん、おネエさん」

声のした方に目を向けると、浮浪者の老女が手招きをしていた。

わたしが無視すると、老女はボロボロの服を引きずって、近寄ってきた。

彼は、自販機が吐きだすお札を財布にしまい、ポケットに手を入れて小銭を探している。

わたしは浮浪者を睨んで、追い返そうとしたけど、老女は立ち止まって、わたしに向かって、にこりと笑みを浮かべた。

そして、自販機の前に立つ彼を指さした。

「あのお兄さん、鬼やで。鬼がついとるよ」

「はあ？」

わたしは眉を寄せた。

「氣いつけな。よおう氣いつけな」

老女は、念じるように繰り返し言つと、鈍い動きで踵を返して、去っていった。

「なに、いまの？」

戻ってきた彼が、老女の背中を見ながら、言った。

「知らない。リュウには、鬼がついてるから、氣をつけろって。痴呆だよ、きつと」

わたしは言つて、甘えるように彼の腕にしがみついた。

「鬼か。確にそうかもな」

薄く笑みを浮かべて彼は呟くと、煙草の封を解いた。

夢から覚めると、タクシーは停まっていた。わたしは慌てて財布を取り出して支払いをすませ、タクシーから降りた。

夜風が頬を冷まして、意識を覚醒させる。彼の夢をみるのは、久しぶりだった。過去に歩み寄ろうとしていることを、夢が察知したのだろうか。でも、いまわたしが逢いたいのは、彼じゃない。玄関の前でひとつ深呼吸して、わたしは呼び鈴を押した。ベルの音が響き、遠ざかる。

しばらくして、玄関の明かりがつき、人影が曇りガラスの向こうで動いた。

「はい、どちらさま？」

少し警戒を帯た、細い声だった。わたしは、無言で佇み、待った。束の間の静寂を置いて、玄関のドアが小さく開いた。隙間から様子を伺うように顔を出したのは、ママだ。

「あら…」

ママは一瞬驚いた顔をして、玄関の中から出てきた。

「どうしたの？よくここがわかったわね」

「お店にいたとき、ママの免許証見ました」

わたしは言った。

「そう。まあ、それはいいけど…。何の用件で来たの？」

「もう一度、働こうと思って…。でも、あても何もなし。わたしに合うようなお店があるなら、紹介して欲しいなって」

「何よ、随分甘ったれてるじゃない」

ママは悪戯に笑った。

「無理なら、いいです」

冷やかされて、わたしは無愛想になった。

「怒らないで。無理ってことはないけど、すぐには探せないわ。あなたが里美みたいな子だったら、簡単なんだけど」

「別に、急ぎませんから」

「そう。じゃあ、見つかったらこっちから連絡するから。番号は変わってないわね？」

「はい」

「少しは元気になったみたいね。会えて良かったわ。もう二度と会

わないと思つてたから」

「わたしも、思つてませんでした。でも、逢いたくなつて…」

わたしは言葉をつまらせた。ママが、微笑む。

わたしは優しさに触れたかった。安心は、わたしにとって尊いモノだから。いつか完全な安らぎの中で、眠れたらと想う。孤独を抱える人間の、ささやかな夢だ。

「どうして？」

「わかりません。ただ、頼ったり出来る人が、他にいないから」

「そう」

ママは頷いた。

「あ、もう帰ります。すいません、急に…」

わたしは頭をぺこっと下げた。

「いいわよ。淋しくなったら、いつでも来なさい」

ママは優しく言つと微笑み、わたしの頬に手を伸ばして、そつと触れた。

わたしはその手の温もりに、心が暖まる前に、もう一度頭を下げ、その場から立ち去つた。

わたしはまだ、優しくなるわけにはいかなかった。例えもう、憎しみや恨みを持たなくなつていても、わたしには許せないモノがある。

あの女が生きている限り、わたしが優しさを持つことは許されない。優しさを与えるということは、すべてを受け入れるということだから。

何かひとつでも許せないモノがある人間が与える優しさは、偽善でしかない。

何より、あの女を許すことは、姉さんの自殺を否定することでもある。許すことで過ちが繰り返されることもあるのだから、すべてを受け入れることが正しいだなんて、誰にも言えない筈だ。

そして許せないわたしは、仮面を被って生きるしかない。

冷血な鬼の仮面か、偽善に微笑む仮面か。

偽善を死ぬほど嫌悪するわたしは、冷血な鬼の仮面を被って生きていく。

例えそのせいで幸せや安らぎが遠ざかるとしても、かまわない。

わたしがいま欲しいのは、生きる力だけだ。

いつか世界のすべてが変わる時まで、生きる力。

14・塵気楼

珈琲の薫りと、パンが焼ける匂いが、澄んだ朝の空気に溶けて、懐かしさと人恋しさを誘う。

まどろむ瞳に映るものは、すべてが煌びやかで、神々しい。新鮮な街の1日のはじまりを、わたしは喫茶店の窓越しに見ている。

散髪屋の主人が店先を箒で掃き、犬と散歩をしている老女が主人に会釈をして、去っていく。ジョギングをするジャージ姿の青年。ブレザーの女子高生。左官屋の格好をした男性。昨日の疲れを引きずるサラリーマンとOL。久しぶりに見る、通り過ぎていくだけの朝の日常。

目に映るものすべてが、わたしに何かを思い出させようとしているみたいだった。

でも、わたしがこれから向き合うべき過去は、この朝の風景とは遠くかけ離れた暗澹としたものだ。

わたしは、白い壁に掛けられた時計に目をやり、時間を確認した。約束の時間は、8時半。いまは、8時15分。

この時間を選んだのは、朝がわたしにもあの女にも似つかわしくないと、思ったから。不自然と違和感がすべてを洗い流して、何も感じずに済めばいいと思った。

店主の男が、白く煙る珈琲とキツネ色に焼けたトーストを運んできて、微笑みを残して去っていった。店主は、少し前の千円札のよな顔をしていた。

わたしは、皿にのっているバターの銀紙をとって、トーストに塗り、珈琲に少しだけ砂糖を入れた。

カラン、とドアが鳴って、あの女が入ってきたのは、その時だった。

「で、話ってなんなの？」

少しハスキーな声で、母は言うと、マルボロの箱をテーブルの上に置いた。既に2本の残骸が、灰皿にのっている。母は箱からまた1本取りだし、口にくわえてライターで火をつけた。

わたしは、珈琲をひとくち飲んでから、口を開いた。

「この前は、ごめんなさい」

「なによ、今更。もう骨はくっついてんのよ。謝るなら、治療費ぐらい出しな」

母は、ハツと鼻で笑ってから言うと、煙を吸い込み、吐いた。

「あんな格好でくるから、悪いんだよ」

ムスツとわたしは眉を寄せ、言った。

「あんた、謝りたいのか、邪険したいのか、どっち。あたしは別に、あんたに包丁でメツタ刺しにされたって、恨みはしないけど」

包丁で刺す程度じゃわたしの恨みは晴れない、と言ってやりたかった。この女には、死という安息すら、与えたくない。

「自覚はあるんだ。殺されるだけのことをしたっていう」

「ないわよ、そんなもの。殺したいぐらい憎んだことはあるけどね。だから、あんたがわたしを恨むのは想像できる」

わたしは黙って、皿に散らかったパン屑に目をやり、それから視線をあてもなく宙に向けた。

母の吐く煙が、ゆらゆら揺れて空気へと溶けていく。カラン、とドアが鳴り、サングラスをかけた髪の毛の長い女性が入ってきた。

「だったら、どうして生んだの。わたしと姉さん」

わたしの声は、低かった。

「憎むことが、どれだけ辛いかわかって、なんで生んだの」

母は、フツと笑った。声にはせず、表情だけで。その瞳には、嘲りの光が宿っている。

「あんた達が勝手に生まれてきたんでしょ。あたしだって、好きで生んだんじゃないわ」

「姉さんは、殺したいぐらい母さんのことを憎んでた。あんたが、

死ねばよかったんだ。わたし達を生むかわりに、あんたが」

わたしはテーブルの下で、ぎゅっと掌を握った。強く握り過ぎたために、腕が震えた。

母はまだ嘲りの目をしている。

「由樹が言ったの、そう？あたしのことを、殺したいぐらい憎んでるって、言ったの？あんた、自分の感情を勝手に由樹の自殺と絡ませてるんじゃない？」

唇を噛んだ。掌に爪が食い込み、ズキリと痛む。わたしは、爆発寸前だった。殺すべきなのかもしれない。それですべてが終るなら、いま、この瞬間に。

「あんたと由樹はね、男が違うの。だから、由樹があんたと同じ考えで生きてたなんて、あたしは思わないよ」

母は言って、首のうしろを掻いた。そして、煙草を灰皿に押しつけると、立ち上がった。

「もう、あんたとはい合わない。言いたいことがあるなら、いま言いな」

母がわたしを、さげすむように見下ろした。わたしはうつ向いたまま、何も言えなかった。

「そう、じゃあ帰るわ」

それが、わたしと母の最後になった。

離れていく足音、カランと鳴るドア。窓越しにみた母の背中は、塵気楼のように、朝の光の中で揺れ霞み、消えていった。

真実が違ったところで、現実は変わらない。それは真実を知っても同じことだ。

わたしは生き続けなければいけないし、塵気楼が消えても灼熱の太陽は大地を焼き続ける。

どこにも逃げ場はなく、向き合うべき相手もない。水を求めて叫んでも、喉が渇くだけ。消えてしまった足跡を辿ることも出来ない

まだらに一步

い。

わたしはひとりだったのだ。生まれてから、ずっと。そして、これからも。

淡い幸せなんか、求めなければ良かった。

15. いつか逢おうね

抱き上げると、あっあっあっ、と声をあげて手足を動かす友香を抱いて、わたしは玄関へ向かった。

玄関では京子さんが、そわそわと落ち着かない様子で、開けつばなしのドアの外を見たり、突然しゃがんで意味もなく靴を揃えたりしていた。

わたしは、その様子をみて、ついクスツと笑ってしまった。

京子さんはわたしに気づくと、笑みを浮かべて近づいてきた。

「用意、出来ました」

「そう。もうすぐ、あの人が車運んでくるから。もう少し待って」

京子さんは言うのと、わたしの背中にまわって、友香の顔を覗いた。友香は、あーあー、と声をあげて、肩に垂れたわたしの髪をつかまえようと、小さすぎる掌を宙で揺らしている。

「昨日は、めずらしく泣かなかったわね」

わたしの背中から腕を伸ばして、友香の頬に触れながら、京子さんは言った。

「泣きましたよ。京子さんの方が、めずらしく熟睡してたんじゃないですか」

わたしが悪戯に言うと、京子さんは、笑った。

「なんだ、じゃあ友香ちゃんは最後まで甘えん坊だったのね、お母さんに似て」

「どうせ、わたしは甘ったれですよ」

わたしがプウツとスネると、友香が面白そうに、えへ、えへん、と笑った。

「なによー」

「ねー、お母さんは、甘えん坊ですわねー」

京子さんの声に反応して、友香は、えっへっへっへん、と笑い続ける。

「もういい、知らない」

と、わたしがソツポを向いても、友香の笑いは止まらない。わたしも、こんな風に呑気に笑っていたのだろうか。何も知らず、何も理解できていないというのに。

あの女は、そんなわたしをどう見たのだろう。きつと、恨めしく思っていたに違いない。姉さんはきつと、だからわたしを置いて逃げたのかもしれない。

無償の笑みには、癒されもするけど、時には苛立ちを増幅させる。無償の笑みと憎悪な恨みは、紙一重の差で、同じ恐怖をたずさえて、つねに発生し続ける。

微笑みが引金となり、磁石のように真逆のものを引き寄せることもあるから。

「おい、車持ってきたぞ！」

外から、昭宏さんの声がした。

「じゃあ、行きます」

わたしは言つて、友香を抱きなおした。

「外まで一緒に行くわ」

と、京子さんは言つて、先に玄関から出ていった。

さつきまで笑っていた友香は、もう、すやすやと眠っている。

このまま、ずっと眠っていてくれればいい、と思いつながらわたしは、白く光る春の陽の下へと出た。

眩しい光に目をふせて、もう一度ゆつくり顔をあげた。

「おら、ちゃんとマ工見る。情けねえな」

フィルムを巻きながら、昭宏さんは言つと、お前も入れ、と京子さんを顎で促した。

「いいわよ、私は」

「いいから入れ。友香にとつたら、お前は婆ちゃんなんだからな」
「失礼ね」

フン、と鼻をならしながらも、京子さんはわたしの隣にきた。わたしは、友香を抱きなおして、カメラを構える昭宏さんに視線をやった。

「フラツシユが日射しと重なるから、すごく眩しい。影がくるまで待つてくれませんか」

「それじゃあ、はつきり写らねえだろが。だいたい、雲がどこにあるんだ。相変わらず馬鹿だな、てめえは」

見上げてみると、確かに燦々と輝く春の青空に、雲は浮いていなかった。

「安物のインスタントなんて、買うからじゃない」

京子さんが、ぼつり、と呟いた。昭宏さんには、聞こえなかったらしく、もうカメラを構えている。

京子さんは、右手を額にもってきて影をつくった。友香を抱いているわたしには、それが出来ない。

「いいか、これが最後だ。これで晴れて自由の身なんだ。もっと明るい顔しろ、ばかが」

昭宏さんが声をあげた。

何の合図もなくシャッターがきられて、わたしはまた、目をふせてしまった。

友香は何事もないように、眠っている。

「京子、お前も来い。友香の母親になる女のツラ、見たくねえのか」窓からだらりと腕を垂らして、車の中から昭宏さんが言った。

京子さんは首を振って、断わった。

「いいのよ。結局、私は他人だし。雫が決めたんだから、例えどんな人でも」

「シケてんなあ、ったく」

と吐き捨て、昭宏さんは、指に挟んだ煙草を口に運んだ。

最後に抱かせてくれる？と、京子さんが言ってきたので、わたし

は無言で頷いて、友香を渡した。

眠っている友香を京子さんは愛しそうに抱き、わたしが知らない鼻唄をうたった。

子供が出来ない体の京子さんは、友香のことを、わたし以上に、自分の子供のように愛してくれた。

1日に何度もミルクをつくるのも、沐浴も、夜泣きも、オムツの交換も、わたし1人だったらきつとパニックになって、途方に暮れていたと思う。

京子さんは、わたし以上に、育児に熱心だった。

「ねえ、雫。本当にこれでいいの？私もあの人も、別に迷惑なんて思っていないわよ。ちゃんとした家族のかたちの中で育て欲しいっていう、あなたの考えもわかるけど、こんな状況なんだから、形なんてこだわらなくてもいいんじゃない？」

「引き渡す相手が、まったく他人だったら、わたしもその方がいいと思います。でも、ちゃんと血は繋がってるわけだし、友香にとっても……」

友香にとっても、何だろう。ずっと先の未来に、友香が何を幸せに思っかなんて、わたしにはわからない。やっぱり、間違っているのだろうか。

でも、わたしの心に、死んでも離したくない、という感情がないというのも、事実だった。

「友香にとっても、その方が幸せだと思います。ちゃんと、愛されて普通の暮らしが送れたら、それだけで」

偽善だ。取り繕った自分の言葉に嫌気がさす。わたしは、自分の愛情に自信が持てないだけだ。きつと、憎んではかりいたツケが、いま回ってきているんだ。でも、そのツケを払う為に、罪を償うみたいに関香を育てたくはない。

いつかわたしの憎しみのツケが、友香の人生を飲み込むことになっても、そのときまでは、幸せに生きていて欲しい。

「いいんです、これで」

わたしはただ、自分に言いきかせる為だけに、呟いた。
友香は、京子さんの腕の中でまだ、眠っている。このまま。

色白で、肩まで伸ばした髪には、パーマがあてられている。健治さん、友香の父親の再婚相手は、朗かな笑みを浮かべて、わたしと友香を出迎えてくれた。

一夜限りとはいえ、夫が関係を持った相手に、こつも笑顔を振りまけるものなのだろうか。

「名前は？」

はじめまして、もなしに女は言った。

「あ、杉栗です」

「へえ、栗ちゃん。綺麗な名前ねえ」

わたしの腕の中で眠る友香を見つめながら、女は甘い声を出した。女は、完全にわたしを無視していた。当然の反応だけれど、腹がたつ。初対面の印象は、消し飛んだ。

「違います、この子は友香。栗は、わたしです」

「あらそう」

しれつ、と冷たい声と視線を女はわたしに投げた。

一瞬、友香を連れて帰りたい衝動に襲われた。こんな女に。

「ねえ、抱かせてくれない？」

女は言って、腕を広げた。わたしは黙って、女に友香を抱き渡した。

すると、女は鼻唄を歌って、そのまま玄関から立ち去ろうとした。わたしは慌てて、声を出した。

「あの、もうミルクの時間だから、これ」

わたしは、一式が入った紙袋を差し出した。ずっと、友香が使っていたものだ。

わたしの声に、女は立ち止まると、無表情に振り返って、言った。「ちゃんと全部、用意してますから。それ、いりません」

最後に微笑んで、女は家の奥へと消えていった。
わたしは、茫然となった。

これで、終わり？

これが、お別れ？

これが、最後？

酷すぎる。あんな女に、友香を渡したくない。

わたしは紙袋を投げ捨てて、土足のまま、玄関をあがった。

が、その瞬間に健治さんが現れたので、わたしは土足で、玄関の床の上に立ち尽くした。

健治さんはわたしの足下に目をやってから、わたしの顔を見た。

「少し、話そう」

土足のことには触れず、健治さんは言った。

待っていた昭宏さんには、先に帰ってもらった。

わたしは、健治さんの後に続いて、2階へとあがった。途中、閉じられたドアの向こうから、女の鼻唄が聞こえたけれど、友香の声は聞こえなかった。まだ、眠っているのだろうか。

書斎のような部屋で、わたしと健治さんは向き合って椅子に座った。

デスクの上の窓から溢れる光に、風に吹かれて揺れる木の葉の影が、時々重なる。

しん、として、落ち着く部屋だった。

「もう、落ち着いたかい？」

健治さんは言って、マイセンを1本取りだし、口にくわえた。

わたしは、黙ったまま何も言わなかった。

火をつけ、煙を吸い込んで、吐く。煙草を指に挟んだ健治さんの腕は、なぜか小さく震えていた。

「吸うんだ、煙草」

「ああ。由樹が死んでから、増えたよ」

健治さんは答えた。姉さんの夫は、つい最近、姉さんの自殺から約2年で再婚した。わたしと関係をもったのは、姉さんの自殺から半年もなかったと思う。

「友香の前では、やめて絶対に」

わたしは、右手で左手の手首を掴み、血を止めるように力を入れた。

「ああ」

と、呟いたかと思うと、健治さんは煙草を灰皿に置いた。

そして、突然椅子から飛び下りると、わたしの足下に両手をついて、おもいつきり額を水色の絨毯に押しつけた。

「すまない、本当に、すまないっ」

床に平伏したまま、健治さんは叫んだ。

「こんなつもりはなかった。俺は、俺は……」

拳で、何度も床を叩く。わたしは、何も感じなかった。どうして、謝るのか。何に対しての、償いなのか。わたしには、何ひとつ理解出来なかった。

「頭、あげて。そんなことしないでよ。父親でしょう」

無感情に、わたしは言った。

「もういいよ、いいから。だから、最後に友香を抱かせて。お願い」

友香を抱いて、庭に出た。草の根のこうばしい匂いと、ざわざわと揺れる葉っぱの音。遠くから響く、踏み切りの音に、列車の警笛。友香がいつか、この庭で懐かしさを覚えるとき、友香の記憶にはわたしはいない。

いつかまた、出逢える日がくるだろうか。母親として、友香に何かしてやれる日が。

すべてを忘れて、断ち切ってしまえばいいのかもしれない。かつて母がわたしにそうしたように。

わたしは、腕の中で眠っている友香に話しかけた。その声はざわ

まだらに一步

りと揺れる葉の音に掻き消されて、友香には聞こえなかったと思う。
最後かもしれない。けど、友香にはそんなことはわからない。でも、それでいい。

「いつか逢おうね、友香」

まだらに一步

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7029c/>

まだらに一步

2009年7月2日03時58分発行